（様式１）　　No.　２２０９

業務実績書

中期計画の項目（Ⅰ６（1））	文化財関係の情報を収集して積極的に発信するため、ネットワークのセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実を図る。また、文化財情報の計画的収集・整理・保管及びそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースの充実を図る。

【事業名称】	情報システムの整備（Ⅰ６（1）①）

【事業概要】
文化財関係の情報を収集し、積極的に発信するために、ネットワーク環境におけるセキュリティの強化及び高速化を進めるなど、情報基盤の整備・拡充を図る。

【担当部課】	企画情報部	【事業責任者】	情報システム研究室長　勝木言一郎

【スタッフ】
綿田稔，江村知子（以上企画情報部），横山隆史（管理部 LAN 委員），俵木悟（無形文化財部 LAN 委員），吉田直人，加藤雅人（以上保存修復科学センターLAN 委員），二神葉子（文化遺産国際協力センターLAN 委員）

【年度実績概要】

１．システム管理
所内におけるシステムの運用については、システム管理者がシステム全体の日常的な運用をはじめ、保守契約等の協議、メールアカウントの管理を行った。また LAN 委員会の協議を経て、中長期的な更新計画を策定した。とくに平成 19 年度は研究活動及び日常業務が遅滞なく円滑に遂行されるように、スパムメール対策を講じた。

２．ネットワーク環境の整備
現在のユーザー環境を維持しつつ、より効率的運用ができるよう、下記の通り、ネットワーク環境を整備した。
・ファイヤーウォールの更新
・スパム対策システムサーバの導入
・ルータの更新

３．情報セキュリティ
東京文化財研究所ネットワークシステム管理規則、東京文化財研究所広報委員会規則、東京文化財研究所 LAN 委員会細則を整備し、所内の情報セキュリティの強化を図った。また情報セキュリティに関するポリシーおよび運用手順の策定に向け、引き続き関連情報を収集した。国立文化財機構情報システム部門連絡会に参加し、国立博物館や文化財研究所におけるシステム管理について情報を収集した。

【実績値】

【備考】

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２２０９

１．定性的評価

観点	適時性	効率性	継続性	正確性		
判定	A	A	A	A		
備考						

２．定量的評価

観点						
判定						
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	情報システムの整備についてはネットワーク環境の更新に伴い、セキュリティの強化及び高速化が図られた結果、適時性、効率性、継続性、正確性が向上したと判断した。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	情報システムの整備についてはセキュリティの強化及び高速化を図るに当たり、現在のユーザー環境を維持しつつ、より効率的な運用ができるよう、ネットワーク環境の段階的な更新を進めた。

（様式１）　　No.　２２１０

業務実績書

中期計画の項目（Ⅰ６（1））	文化財関係の情報を収集して積極的に発信するため、ネットワークのセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実を図る。また、文化財情報の計画的収集・整理・保管及びそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてデータベースの充実を図る。

【事業名称】	ネットワークのセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実（Ⅰ6（1）①）

【事業概要】
コンピュータウイルスをはじめとする様々な脅威から研究所の情報を守り、正確な情報を発信して行くため、ネットワークのセキュリティを強化する。また、文化財情報の電子化によるデータベース及びホームページに掲載された情報の所内外への提供を推進するため、サーバ機器・ネットワークといった情報基盤システムの整備・充実を行う。

【担当部課】	管理部文化財情報課	【事業責任者】	課長　山田 耕一

【スタッフ】
太田 仁 ほか１名

【年度実績概要】
昨年策定した情報セキュリティ・ポリシーに沿って、ネットワークの安全に努めた。
ファイアーウォール・グループウエア(サイボウズ)のバージョンアップを行ない、Web 用 のウイルス対策にサーバを更新した。
また、 例年通り PC 用のウイルス対策ソフトの更新も行なった。

【実績値】

【備考】

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２２１０

１．定性的評価

観点	効率性	継続性				
判定	A	A				

備考
継続性：適切に機器及びソフトの更新した。
効率性：グループウエアを更新した。

２．定量的評価

観点						
判定						

備考

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	年度を通じて、システムの障害が発生することなく、安全な運用ができているので、総合的に判断して A と評価した。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	情報漏洩・ウイルス感染もなく、機器及びソフトの更新がなされ、安全に運用できたので、順調と判定した。

（様式１）　　No.　２２１１

業務実績書

中期計画の項目（Ｉ６（１））	文化財関係の情報を収集して積極的に発信するため、ネットワークやセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実を図る。また文化財情報の計画的収集・整理・保管及びそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースの充実を図る。

【事業名称】	専門的アーカイブの拡充（Ｉ６（１）②）

【事業概要】
企画情報部では１）受入した文化財関連の図書などの文字資料や、作成したアナログ・デジタル画像資料の登録・管理、２）閲覧室で月・水・金の週３回一般利用者へ所蔵資料を提供、３）データベースや検索システムの構築・運用を通常業務としている。過去五カ年で定まった文化財関連資料の公開機関としての周知をふまえ、今期五カ年では提供する資料や情報の質に主眼を置き、より専門性の高い文化財関連資料や情報の収集・構築・公開の場として専門的アーカイブの拡充を図る。また、上記アーカイブのための資料収集及び作成には画像形成技術の開発が必要不可欠である。画像形成部門では、常に技術の進歩をみる写真機材及び設備の整備が必須であり、本プロジェクトでは継続的なこれらの更新を行うことによって、世界最先端の研究活動を支援することをも目的とする。

【担当部課】	企画情報部	【事業責任者】	文化財アーカイブズ研究室長　山梨絵美子

【スタッフ】
中野照男、勝木言一郎、皿井　舞、江村知子、中村節子、中村明子、井上さやか（以上、企画情報部）

【年度実績概要】
（１）資料閲覧室運営
従来どおり文化財に関する文字資料及び画像資料の収集、管理、公開、データベースの構築・運用を基本に、より充実した文化財に関するアーカイブの形成を試みた。デジタルコンテンツ作りでは、『美術研究』総目次のデータ化と、文化財年表作成の資料として『日本美術年鑑』（朝日新聞社）のデータ化を継続した一方、利用頻度が高まるにつれ、劣化が進む資料類や機器類の保護対策として、資料については引き続きデジタル化をすすめ、また順次機器の更新を行った。また、国内外の関連機関との協力関係構築への取り組みとして他機関の資料収集・整理・公開システムを調査し、さらに有効なシステム構築のための協議を行った。
（２）画像情報室
従来に引き続き、他部・センター、他機関との共同調査研究により文化財の画像資料の収集・作成を行った。また、黒田清輝遺族から寄贈された資料写真を整理し、第一次寄贈写真のデジタル化を完了。風合いを再現した出力を試み、その成果を黒田記念館での特集展示「写された黒田清輝」で公開した。画像資料の作成・整理については、写真管理検索システムへの４×５カラーフィルムの登録、戦前の撮影調査票一覧のデータ化、写真原板検索システムの外部公開を開始した。昨年度より継続の尾高鮮之助、和田新撮影フィルムについては文化遺産国際協力センターの協力を得て、画像をデジタル化した。また、デジタルアーカイブで公開中の『紅白梅図屏風』の画像の冊子体での提供を開始した。

企画情報部にて作成・更新中のデータベース（35 種）
・所蔵和漢書ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ(2006 年度まで)　・受入和漢書ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ(2007 年度分)　・所蔵洋書ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ　・所蔵簡易図書ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ　・売立目録ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ　・所蔵美術館博物館収蔵目録ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ　・和雑誌誌名ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ　・所蔵洋雑誌誌名ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ　・所蔵中国雑誌誌名ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ　・所蔵韓国雑誌誌名ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ　・所蔵和雑誌巻号ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ(2002 年まで)　・所蔵洋雑誌巻号ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ(2005 年まで)　・所蔵和雑誌巻号ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ(2003 年以降)　・所蔵洋雑誌巻号ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ(2006 年以降)　・所蔵中国雑誌巻号ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ　・所蔵韓国雑誌巻号ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ　・所蔵地方公共団体刊行報告書ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ　・所蔵香取秀真資料関係ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ　・展覧会ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ(2002 年まで)　・展覧会ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ(2003 年以降)　・近現代作家名ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ　・近現代展覧会開催情報ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ(1944 年以降)　・写真原板ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ　・ｷｬﾋﾞﾈｯﾄ写真ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ　・古美術文献目録ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ(明治～1965 年)　・近現代美術文献目録ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ(1959～1990 年)　・美術館博物館名ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ　・東京文化財研究所年表ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ　・所蔵古美術展図録目次ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ(1989～2001 年)　・美術研究総目次ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ　・所蔵近現代図録目次ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ(1948～1990 年)　・撮影調査票ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ　・古美術展覧会開催情報ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ(1944 年以降)　・物故記事ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ　・美術懇話会・開所記念展覧会出品目録ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ

研究資料検索システムにて提供中のデータベース（ Ｉ→イントラネット　Ｏ→インターネット）
・Ｉ／Ｏ 美術関係図書データ　・Ｉ 古美術文献データ　・Ｉ／Ｏ 伝統芸能関係図書データ　・Ｉ 近現代美術文献データ
・Ｉ／Ｏ 保存修復関係図書データ　・Ｉ／Ｏ『保存科学』所載文献データ(2007.5 外部公開開始)　・Ｉ／Ｏ 売立目録データ
・Ｉ／Ｏ 伝統芸能関係三雑誌所載文献データ　・Ｉ／Ｏ 展覧会カタログデータ　・Ｉ／Ｏ 近現代美術展覧会開催情報データ
・Ｉ／Ｏ 和雑誌データ　・Ｉ／Ｏ 伝統楽器情報データ　・Ｉ／Ｏ 写真原板データ　(2007.6 外部公開開始)

【実績値】
通常フルカラー画像撮影件数　３５６０件　特殊画像撮影件数　１４５０件　デジタル画像撮影の全体にしめる割合　99%
図書受入数　和漢書　914 件　洋書　0 件　展覧会図録・報告書等　864 件　雑誌　1,488 件　受入総数　3,266 件
目録所在情報　目録所在情報の種類　35 種　目録所在情報作成件数　32,484 件
目録所在情報収録件数　648,759 件　目録所在情報公開件数　528,039 件
イントラネットで公開中の目録累計数　１３種
資料閲覧室の利用状況　公開日総数　１４０日　利用者年間合計　1,120 人　平成１８年度の利用者数との対比　194 人増

【備考】
所内イントラネットによる目録の公開　http://www2.tobunken.go.jp

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２２１１

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

２．定量的評価

観点	文献資料受入件数	画像資料収集件数	データベース公開件数	閲覧室利用者数		
判定	A	A	A	A		
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的にも定量的にも目標値を満たし、閲覧室利用者の増加に見られるように国民の文化財理解にも資することができた。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今後は、国内外の関連機関の調査、協議をさらに進め、当研究所の持つ文化財アーカイブの特色を活かした資料収集および公開を進めていきたい。

（様式 1）　　No.　２２１２

業務実績書

中期計画の項目 Ⅰ６（1）	文化財関係の情報を収集して積極的に発信するため、ネットワークやセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実を図る。また文化財情報の計画的収集・整理・保管及びそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースの充実を図る

【事業名称】	東京文化財研究所七十五年史編纂事業（Ⅰ６（1）②）

【事業概要】
昭和 29 年 7 月に当所の前身である東京国立文化財研究所が設立されて以来、当所の歴史を概観するものは「20 年のあゆみ」が刊行されている他は、各年度の事業を記した概要、年報が刊行されているのみで、まとまった所史は編纂されていない。本事業は、東京国立文化財研究所の前身である帝国美術院附属美術研究所が昭和 5 年 6 月に設立されてから平成 17 年で 75 周年を迎えたのを機に、当所の歴史を跡づけ、さらには東京国立博物館との統合を迎える平成 18 年までの記録を残すことを目的として、資料収集及びそのデータ化を図り、所史を編集する

【担当部課】	企画情報部	【事業責任者】	文化財アーカイブズ研究室長　山梨絵美子

【スタッフ】
永井義美（管理部）、飯島満（無形文化遺産部）、佐野千絵（保存科学部）、川野邊渉（修復技術部）、岡田健（文化遺産国際協力センター）、中野照男、塩谷純、中村節子、中村明子、井上さやか（以上、企画情報部）

【年度実績概要】
『東京文化財研究所七十五年史　資料編』を刊行し、本編（沿革編および調査研究編）の原稿作成、校正を進めた。また、その一部を研究等に資するデジタル・コンテンツとして公開に向けて編集し、ホームページ上での公開に向けて加工を進めた。

『東京文化財研究所七十五年史　資料編』

【目次】東京文化財研究所七十五年のあゆみ／東京文化財研究所　略年表／科学研究費研究課題一覧／受託研究一覧／特別研究一覧／アジア文化財保存セミナー／アジア文化財保存修復研究会・国際文化財保存修復研究会／在外日本古美術品保存修復協力事業／開所記念展覧会／黒田清輝展巡回記録／美術部・情報資料部夏期学術講座／近代の文化遺産の保存修復に関する研究会／芸能部公開学術講座／美術部公開学術講座・オープンレクチャー／文化財の保存及び修復に関する国際研究集会／能楽技法講座／文化財保存修復研究協議会／民俗芸能研究協議会／漆の保存修復国際研修／紙の保存修復国際研修／資料保存地域研修／連携大学院教育／博物館学実習／海外学術調査員および研究者のための保存修復講座／保存担当学芸員研修／開設期の公文書／東京文化財研究所所蔵作品一覧／戦前期撮影調査票一覧／東京文化財研究所所蔵　拓本総目録／東京文化財研究所所蔵　龍門石窟造像銘記拓本目録／和田新調査撮影記録／尾高鮮之助調査撮影記録／矢代幸雄収集西洋美術関係図版目録／美術懇話会主催展観及び講話等／美術懇話会会員名簿／東洋美術国際研究会会員名簿／『美術研究』総目次／『美術研究』掲載図版総目次／『保存科学』総目次／『芸能の科学』総目次／東京文化財研究所所蔵　“Bulletin of Eastern Art”総目次／東京文化財研究所所蔵刊行物一覧／歴代名誉研究員一覧／職員名簿／東京文化財研究所所蔵資料統計／閲覧者数統計／機構の変遷／定員構成の変遷／予算／土地建物の変遷／関係法規（抜粋）

【実績値】
刊行物数：１件

【備考】
『東京文化財研究所七十五年史　資料編』　08.03 刊行　総ページ数 905 ページ　600 部

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２２１２

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	独創性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

２．定量的評価

観点	刊行物数					
判定	A					
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	計画通り刊行することができたのでＡと判定した。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	平成２１年度の刊行をめざして、『東京文化財研究所七十五年史　本編』の作成にとりかかる。また、『資料編』に掲載された目録等を加工してウェブ上で公開していきたい。

（様式１）　　No.　２２１３

業務実績書

中期計画の項目（Ｉ６（1））	文化財関係の情報を収集して積極的に発信するため、ネットワークのセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実を図る。また、文化財情報の計画的主州・整理・保管及びそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースの充実を図る。

【事業名称】	無形文化財に関わる音声・画像・映像資料のデジタル化（Ｉ６（1）②）

【事業概要】
無形文化遺産部が所蔵する音声・画像・映像資料のデジタル化。平成 18 年度からの中期計画では、平成 17 年度に終了した中期計画の事業案策定後に購入あるいは寄贈を受けたアナログ資料を中心に、これまで収集蓄積してきた分野を補完する資料の媒体転換を重点的に実施する。併せて、既にデジタル化を済ませた音声資料に関しては、インデックス付与を含む整理を推進する。この事業は、将来的には所蔵資料のデータベース公開と音声・画像等の配信をめざすものである。

【担当部課】	無形文化遺産部	【事業責任者】	無形文化遺産部長　宮田繁幸

【スタッフ】
飯島満、鎌倉惠子、高桑いづみ、俵木悟、佐竹悦子、角美弥子、綿貫潤（以上、無形文化遺産部）

【年度実績概要】
２００６年度までに受入れ手続きが完了した資料の内、経年変化に伴う音質劣化が懸念されるオープンテープ約８００本（４トラック録音約３００本を含む）のデジタル化に本格的に着手した。これらは、無形文化遺産部がこれまでに収集蓄積してきた分野を補完する資料を数多く含むものである。
今年度は、昨年度に引き続き、資料的な価値が高く、なおかつ資料の絶対数が少ない古曲（河東節・一中節・宮薗節・荻江節）のデジタル化を進めたが、これらに加え、旧芸能部の時代には収集実績の比較的少なかった新内節や諸芸（舌耕芸など）の分野に範囲を広げ、２６１枚のＣＤを作成した。また、中世近世芸能を中心に、インデックス付与済みＣＤ６１枚を作成した。
所蔵画像資料のデジタル化については、データベースの作成に着手しており、これまでに五代目尾上菊五郎写真、五代目菊五郎以外の明治大正期の歌舞伎絵はがき・ブロマイドの所蔵一覧を公表してきたが、本年度は、主に昭和２０年代に撮影された歌舞伎舞台写真１０８０点の所蔵一覧を作成し、公表した。今年度所蔵を公表した舞台写真は、市販目的というよりも記録を目的に撮影されたとおぼしきものが多く、戦後の歌舞伎を知るうえで、非常に貴重な資料である。
このほか、無形文化財関連のＤＶＤ１９０枚を登録した。これらは、昭和３０年代にさかのぼる映像を含む貴重な資料である。

【実績値】
作成資料［ＣＤ］３２２枚　　［ＤＶＤ］１９０枚

【備考】
作成資料一覧
作成実数３３

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２２１３

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考						

２．定量的評価

観点	資料作成数					
判定	A					
備考						

３．実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	新たに寄贈された資料を中心に、劣化が懸念される貴重なアナログ資料の媒体変換を行うとともに、デジタル化しただけでは一般の利用には供しがたい音声資料へのインデックス付与も着実に実施している。また、専門の研究者も少なく、現存資料の確認すら十分に行われていない古曲などに加え、これまで収集実績の乏しかった分野の資料整理も併せて遂行している。以上の状況を総合的に判断して、Aと判定した。

４．当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	事業は、従来の水準を維持している。また、所蔵資料の内、写真資料については、将来的なデータベース公開へ向けて、所蔵一覧の作成を着実に進めている。以上により、事業の進捗状況を順調と判定した。

（様式１）　　No.　２２１４

業務実績書

中期計画の項目（Ⅰ６（１））	文化財関係の情報を収集して積極的に発信するため、ネットセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実を図る。また、文化財情報の計画的収集・整理・保管及びそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースの充実を図る。

【事業名称】	国際資料室の整備（Ⅰ６（１）②）

【事業概要】
本プロジェクトは、国際資料室に配置する外国の文化財や文化財保存修復事業に関する蔵書・資料の質及び量を充実させ，国際文化財保存修復協力センターでの関連の研究や事業に利用するとともに，国内外の関連分野の専門家が閲覧・利用できるようにする。同時に，資料のデータベース化を行い，利用者の便を図る。

【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	主任研究員　二神葉子

【スタッフ】
清水真一、稲葉信子、岡田健、山内和也、朽津信明（以上、文化遺産国際協力センター）

【年度実績概要】
1　資料の収集とデータベース化
今年度はインド、インドネシア、中国などの文化財に関する資料及び世界遺産、保存科学、文化財保護制度などに関する書籍 900 点（和漢書 273 点、洋書 627 点）、雑誌 590 点の資料を収集し、データベース化した。また、関野克・元東京文化財研究所長旧蔵資料約 300 点を受け入れた。

2　『国際資料室蔵書目録』の作成
2008（平成 20）年 3 月に、今年度に国際資料室で受け入れてデータベース化した 900 点（和漢書 273 点、洋書 627 点）の資料、及び国際資料室で所蔵する雑誌 414 種類を掲載した『国際資料室蔵書目録』を発行した。

【実績値】
目録作成数　1 件（①）

【備考】
①『国際資料室蔵書目録』　08.3　152p

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２２１４

１．定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性			
判定	A	A	A			
備考						

２．定量的評価

観点	目録作成数					
判定	A					
備考						

３．実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査研究業務に必要な資料を効率的に多数収集し、データベース化している。内容は外国の調査地で収集した資料や、文化財保護制度に関する外国語文献など独創的である。次年度以降も、本センターの他事業との連携をいっそう強化し、資料の収集を実施する。

４．当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	資料の収集は例年の実績を堅持し、順調に実施することができた。今後も、書籍に限定せず会議資料や機関のパンフレット、地図など、多様な資料の充実に努めたい。

（様式１）　　No.　２２１５

業務実績書

中期計画の項目（Ⅰ６（1））	文化財関係の情報を収集して積極的に発信するため、ネットセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実を図る。また、文化財情報の計画的収集・整理・保管及びそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースの充実を図る。

【事業名称】	文化財保存修復国際情報データベース化に関する研究（Ⅰ６（1）②）

【事業概要】
世界各地の文化財およびその保存修復に関する情報を収集・整理し、調査研究に活用するとともに、関連分野の専門家に対して効果的に発信していくことを目的にデータベースを作成する。
また、文化遺産国際協力センターでこれまでに実施してきた事業の成果をデータベース化して公開する。
さらに、ウェブサイトを利用してセンターの事業について広報を行う。

【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	主任研究員　二神葉子

【スタッフ】
清水真一、稲葉信子、岡田健、山内和也、朽津信明（以上、文化遺産国際協力センター）

【年度実績概要】
１　情報の収集とデータベース化
平成 13 年度から収集を行っている世界各国の文化財保護に関連する法令について、引き続き法令を収集するとともに、日本の文化財保護法で用いられている分類を手がかりとして、昨年度に引き続き各国の法令が対象とする文化財による分類を行い、データベース化を実施している。
また、今年度は平成 13 年度に引き続き、本研究所所長などを務められ、日本の文化財保護行政に深く関わられた関野克氏旧蔵資料約 300 点を博物館明治村から受け入れ、整理・分類の上データベース化した。この成果は、「関野克氏資料集　２」として印刷・出版した。
さらに、今年度はアフガニスタンについて、カーブルからバーミヤーンにかけての地域の衛星画像（CORONA、Quickbird および ALOS）を収集した。
２　情報の発信
これまでに和訳した世界各国の文化財保護に関連した法令の条文について PDF 化を行い、ウェブサイトに公開している。さらに、文化遺産国際協力センターが遺跡保存に関する現地機関との共同研究を行っているカンボジアの、文化財保護に関する法令を網羅的に収集、和訳し、「文化財保護関連法令集　カンボジア」として印刷・出版した。さらに、当センターの活動について紹介するパンフレットを作成した。このほか、文化遺産国際協力センターのウェブサイトで、最新の出版物の目次やプレスリリース等を掲載することで、研究成果を公開している。

【実績値】
報告書作成数　２件（①, ②）
データベース作成数　１件
パンフレット作成数　１件（③）

【備考】
①「文化財保護関連法令集　カンボジア」08.03　95p
②「関野克資料目録　２」08.02　35p
③「Japan Center for International Cooperation in Conservation」（英語版パンフレット）08.03

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２２１５

１．定性的評価

観点	適時性	発展性	独創性			
判定	A	A	A			
備考						

２．定量的評価

観点	出版物作成数	データベース作成数				
判定	A	A				
備考						

３．実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財保存修復国際協力に関する関野克資料の収集・データベース化や、文化財保護に関する法令の収集・翻訳、さらに出版は他に例がない事業であり独創的であり、当該分野への貢献度を高く評価するものである。また、研究成果の発信も速やかに実施している。これらの事業を来年度以降も引き続き行っていく。

４．当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	文化財保存修復および国際協力に関する資料の蓄積、および本センターの調査研究成果の発信を順調に実施することができた。次年度以降も当該年度の水準を維持し、文化財保護関連法令集のシリーズ化など、いっそうの資料収集・整理、成果発信を実施していきたい。

（様式１）　　No.　２２１６

業務実績書

中期計画の項目（Ⅰ６(1)）	文化財関係の情報を収集して積極的に発信するため、ネットワークのセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実を図る。また、文化財情報の計画的収集・整理・保管及びそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてデータベースの充実を図る。

【事業名称】	文化財関係資料や図書の収集・整理・公開・提供の充実（Ⅰ６（1）③）

【事業概要】
文化財に関する資料・図書を計画的に収集・整理し、外部の研究者および一般の利用者に積極的に公開・提供するための方策を検討し、実施する。

【担当部課】	管理部文化財情報課	【事業責任者】	課長　山田 耕一

【スタッフ】
太田 仁 ほか５名

【年度実績概要】
遺跡の発掘調査報告書、歴史的建造物の修理報告書等歴史・考古学分野を中心に図書・逐次刊行物の購入および寄贈による収集・整理を行った。また、発掘調査関係の遺跡、建造物、庭園等の写真の収集、整理を行った。
図書館システムを導入するとともに、本庁舎をはじめ、藤原地区・飛鳥資料館にも自動寄出返却装置を設置して利用の便宜を図り、さらに所外への目録(OPAC)では、これまで公開を控えていた分野の所蔵情報も公開し、一般利用者へのサービスを向上させた。

【実績値】

平成19年度受入資料数		目録所在情報		利用者サービス	
購入図書	2,986 冊	目録所在情報収録件数	307,275 件	一般利用者数	352 人
寄贈図書	11,162 冊	目録所在情報公開件数	297,783 件	一般利用者利用冊数	2835 冊
写真資料	4,829 点			直接来館者複写件数	764 件
				ILL による複写件数	618 件

【備考】

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２２１６

１．定性的評価

観点	適時性	効率性	継続性	独創性		
判定	A	A	A	A		

備考
適時性：文化財関係資料の所外への公開
効率性：図書館システム導入による貸出処理の簡素化
継続性：資料の継続的収集、公開
独創性：文化財関係資料を重点的に収集

２．定量的評価

観点	資料・図書の受入数	目録所在情報作成件数	資料閲覧室等の利用者数			
判定	A	A	A			

備考
・平成 18 年度受入資料数
購入図書 1,905 冊
寄贈図書 10,589 冊
写真資料 15,177 点
・目録所在情報作成件数 8,565 件
・目録所在情報公開件数 325,243 件
・目録所在情報収録件数 325,243 件
・一般利用者数 220 人
・一般利用者利用冊数 1,129 冊
・直接来館者複写件数 775 件
・ILLによる複写件数 401 件

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	図書館システムを導入することにより公開性・効率性が向上し、また文化財に関する資料の継続的収集についてもこれまで通り収集できている。あわせて、利用者数・利用冊数・複写件数ともに増加が認められる。これらの結果を総合的に判断して、Ａと評価した。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	資料・図書の収集・整理については、寄贈資料の比重が高いため多少の変動が生じるのは止むを得ぬところであるが、一定の水準は確保できたと考える。一方、利用者数と所外からの複写依頼は著しく増加しているので、順調と判断した。

（様式１）

No.　２２１７

業務実績書

中期計画の項目 （Ｉ６（１））	文化財関係の情報を収集して積極的に発信するため、ネットワークのセキュリティの強化及び高速化等に 対応した情報基盤の整備・充実を図る。また、文化財情報の計画的収集・整理・保管及びそれらの電子化の推 進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてデータベース の充実を図る。

【事業名称】	文化財情報電子化の研究に基づき、データベースの充実（Ｉ６(１)④)

【事業概要】
文化財情報の電子化及びシステムの構築に関する研究を行い、文化財の特性に対応したシステムによるデータベースの構築 を継続、データの拡充を行う。一般に公開するデータベースへとデータを提供するとともに、内部の業務用データベースのデータ拡充もあわせて行う。

【担当部課】	企画調整部	【事業責任者】	文化財情報研究室長　森本晋

【スタッフ】

【年度実績概要】
文化財情報の電子化及びシステム構築については、研究会等においてそれらの研究成果を公表す
るとともに、所外の研究状況 について情報を収集し、今後のシステム構築、改良等の検討材料とした。10月には地理情報システム学会大会において「遺跡情報モデルを対象とした地理情報応用スキーマの実装」と題して、遺構情報の分析に関する研究成果を発表した。
また、11月に第12回となる遺跡GIS研究会を開催し、セル・オートマトン、博物館資料の情報モデル、デジタル測量調査、インタラクティブなヴァーチャル・リアリティについて研究発表が行われた。
文化財情報の電子化として、全文、木簡、図書、抄録、写真、遺跡、航空写真等の各データベースにおいて、データの更新ならびに追加入力を行い、データの充実に努めた。また、業務用のデータベースについては、各担当で作成したデータの追加を行った。
なお、データベースへの入力に際しては、事前のデータ整理が必要である。本年度も個々のデータについて広い範囲の文献や参考書目等の調査を行いながらデータの拡充を行った。
写真データベースの基礎となる写真の電子化に関しては、35mm、ブローニ、4×5、8×10、ガラス乾板、奈文研が発注した空中写真ついて電子化を継続した。航空写真データベースにおいては、入力の基礎となる原フィルムからのマイクロフィルム作成、マイクロフィルムからの電子画像の作成を継続して行った。

【実績値】
データベースの件数　平成19年度末　（　）内は平成18年度末の値
全文119,648（41,820）、木簡152,352（150,243）、図書298,341（325,009）、抄録49,476（43,829）、写真180,204（160,020）、遺跡383,816（363,876）、航空写真1,130,890（1,103,718）

【備考】
地理情報システム学会第16回研究発表大会
第12回遺跡GIS研究会

（様式２）

自己点検評価調書

№.　２２１７

１．定性的評価

観点	継続性	正確性	独創性	発展性	適時性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

２．定量的評価

観点						
判定						
備考						

３．実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	総じて事業は順調かつ効率的に進捗していることから総合評価をAにした

４．当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	各データベースにおいて、着実にデータの充実が進んでいる。システムの改良を行いつつ、新規入力のみならず、既存データの更新も推進し、全体として当初計画通り進捗しているので、順調と判定した。

（様式１）　　No.　２２１８

業務実績書

中期計画の項目 （Ｉ６（2））	文化財に関する調査・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を平成１８年度の実績以上刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催等により、積極的に公開・提供する。また、研究所の研究・業務等を広報するためホームページの充実を図り、ホームページアクセス件数を前期中期計画期間の年度平均以上確保する。

【事業名称】	『東京文化財研究所年報』・『東京文化財研究所概要』・『東文研ニュース』の刊行（Ｉ６（２）①）

【事業概要】
『年報』『概要』『ニュース』など広報三誌の編集・刊行は、研究所が進める広報活動の中核に位置づけられる。それらの目的は、媒体に応じて、調査・研究、国際協力の推進、調査研究成果の発信、協力・助言など、研究所が担うさまざまな活動を、対外向けに情報発信することにある。またそれらのデータはホームページ上でも PDF ファイル形式でも配信されている。

【担当部課】	企画情報部	【事業責任者】	情報システム研究室長　勝木言一郎

【スタッフ】
中野照男，山梨絵美子，塩谷純，田中淳，津田徹英，綿田稔，皿井舞，江村知子、城野誠治，中村節子，中村明子，井上さやか，鳥光美佳子（以上、企画情報部）

【年度実績概要】

１．『年報』2006 年度版の刊行
2006 年度が第２期中期計画第１年に当たることにあわせ、『年報』の装丁を改めた。その構成は従来通り、機構、年度計画及びプロジェクト報告、その他の研究活動、個人の研究業績、研究交流、主な所蔵資料、研究所関係資料、東京文化財研究所プロジェクト索引とした。

２．『概要』2007 年度版の刊行
2007 年度の組織改編に伴い、『概要』の構成を、組織、職員一覧、各部・センターの紹介、研修・助言・指導、大学院教育・公開講座、情報発信、刊行物、資料に改めた。またその文章は従来通り、日英２カ国語併記とし、図版を多用した。

３．『東文研ニュース』の刊行
研究所の研究活動のうち速報性と公共性の高い記事、文化財の研究方法や研究所の歴史などを一般向けに解説したコラム、そして刊行物の案内などを四半期ごとに掲載した。また、『東文研ニュースダイジェスト』（『ニュース』英語版）を刊行し、海外の読者向けに情報発信を進めた。平成 19 年度の実績は下記の通りである。
№29　全 16 頁　記事 18 件　図版 18 件　コラム２件　　№30　全 16 頁　記事 20 件　図版 23 件　コラム２件
№31　全 16 頁　記事 24 件　図版 18 件　コラム２件　　№32　全 20 頁　記事 21 件　図版 32 件　コラム２件
TOBUNKEN NEWS DIGEST　全 16 頁

４．『所蔵目録』の刊行
蔵書目録データ 17,412 件の入力・校正を行い、『東京文化財研究所所蔵目録７　外国語雑誌編』を刊行した。
収録内容は、欧文 439 種、中文 130 種、韓文 41 種である。

【実績値】
刊行物数　『東京文化財研究所年報』2006 年度版　1,000 部（①）
『東京文化財研究所概要』2007 年度版　4,000 部（②）
『東文研ニュース』第 29 号・第 30 号・第 31 号・第 32 号　3,000 部（③-⑥）
『東京文化財研究所所蔵目録７　外国語雑誌編』（⑦）

【備考】
①『東京文化財研究所年報』2006 年度版　2007 年５月 31 日発行
②『東京文化財研究所概要』2007 年度版
③『東文研ニュース』第 29 号　2007 年５月 31 日発行
④『東文研ニュース』第 30 号　2007 年８月 31 日発行
⑤『東文研ニュース』第 31 号　2007 年 11 月 30 日発行
⑥『東文研ニュース』第 32 号　2008 年２月 28 日発行
⑦『東京文化財研究所所蔵目録７　外国語雑誌編』

（様式２）

自己点検評価調書

№.　２２１８

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

２．定量的評価

観点	刊行物数					
判定	A					
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	『年報』『概要』『ニュース』の刊行に際し、いずれも紙面の内容を見直し、その充実を図った。またそれらの配布先を検討したほか、一般向けへの配布を拡大した。こうした結果、広報企画事業の適時性、独創性、発展性、効率性、継続性、正確性が改善された。したがって実績の総合評価も十分な成果が認められると結論した。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	『年報』『概要』『ニュース』の刊行に際し、いずれも紙面の内容を見直し、その充実を図ったこと、そしてそれらの配布先を検討したほか、一般向けへの配布を拡大したことから、東京文化財研究所における広報活動の事業展開が拡充された。こうした実績から、当年度における中期計画の実施状況は順調であると判断した。

（様式１）　　No.　２２１９

業務実績書

中期計画の項目（Ⅰ６（２））	文化財に関する調査・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を平成 17 年度の実績以上刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催等により、積極的に公開・提供する。また、研究所の研究・業務等を広報するためホームページの充実を図り、ホームページアクセス件数を前期中期計画期間の年度平均以上確保する。

【事業名称】	『平成 18 年版　日本美術年鑑』・『美術研究』の刊行（Ⅰ６（２）①）

【事業概要】
各年の美術活動と美術研究、批評の状況を記録するために、昭和 11 年以来刊行を続けている「日本美術年鑑」を年 1 冊刊行するとともに、昭和 7 年 1 月以来、日本・東洋の古美術、日本の近代・現代美術等に関わる研究論文・図版解説・書評、展覧会評、研究資料、研究ノート等を掲載する「美術研究」を年 3 冊刊行する。

【担当部課】	企画情報部	【事業責任者】	近・現代視覚芸術研究室長　田中淳

【スタッフ】
中野照男、田中淳、山梨絵美子、勝木言一郎、津田徹英、塩谷純、綿田稔、皿井舞、江村知子（以上、企画情報部）、相澤正彦、青木茂（以上、企画情報部客員研究員）

【年度実績概要】
①『平成 18 年版　日本美術年鑑』
2005（平成 17）年美術界年史、美術展覧会（企画展、作家展、団体展）、美術文献目録（定期刊行物所載文献、美術展覧会図録所載文献（企画展、作家展））、物故者
②『美術研究』392 号
（論　　文）皿井舞「醍醐寺薬師三尊像と平安前期の造寺組織（上）」
（論　　文）江村知子「根生いの分限、絵描きへの道―尾形光琳を取り巻く環境と作品制作について―」
（論　　文）塩谷純「川端玉章の研究（一）」
（論　　文）蔵屋美香「絵画の下半身―一八九〇年～一九四五年の裸体画問題―」
（展覧会評）戸田佑「浦上玉堂展」
③『美術研究』393 号
（論　　文）勝木言一郎「古代の日本における阿弥陀浄土図の受容とその位相―法隆寺金堂壁画第六号壁と当麻曼荼羅をめぐる受容の本質とその言説の形成を中心に―」
（論　　文）皿井舞「醍醐寺薬師三尊像と平安前期の造寺組織（中）」
（論　　文）綿田稔「自牧宗湛（上）」
（展覧会評）田中淳「昭和前期をめぐる三人の画家たち―小島善三郎・鶴岡政男・靉光―」
（書　　評）津田徹英「根立研介『日本中世の仏師と社会―運慶と慶派・七条仏師を中心に―』」
④『美術研究』394 号
（論　　文）綿田稔「自牧宗湛（中）」
（論　　文）相澤正彦「土佐光吉と大画面絵画」
（論　　文）張辰城（石附啓子訳）「朝鮮後期古董書画収集熱の性格―金弘道の《布衣風流図》と《士人肖像》に対する検討―」
（研究資料）江村知子「土佐光吉筆「曽我物語図屏風」について」

【実績値】
『日本美術年鑑』刊行数　１点　（①）
『美術研究』刊行数　　３点　（②～④）

【備考】
①『平成 18 年版　日本美術年鑑』東京文化財研究所　08.3
②『美術研究』392 号　東京文化財研究所　07.9、　③　『美術研究』393 号　08.1、　④　『美術研究』394 号　08.3

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２２１９

１．定性的評価

観点	適時性	発展性	正確性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考						

２．定量的評価

観点	刊行物件数	配布部数				
判定	A	A				
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	広く文化財、美術史研究の情報を調査収集、データ化した『日本美術年鑑』は、計画通り刊行できた。しかし、情報量の増大にともなう編集作業の増大は、情報のより精査が必要になっている点、及び編集作業の効率化を次年度にむけた改善点としてあげたい。また、『美術研究』においては、研究論文だけではなく、書評、展覧会評、研究ノートなど、将来の研究成果を見据えた萌芽的な研究をも掲載するようにしたことなどで、各号が質量ともに充実する傾向にあることを評価したい。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画にあげた実施状況は、順調である。『日本美術年鑑』については、情報の調査収集と編集作業の効率化にむけて、あらためて問題点を改善し、次年度にむけて改善したいと考えている。

（様式１）　　No.　２２２０

業務実績書

中期計画の項目 （Ⅰ６（２））	文化財に関する調査家・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を平成 17 年度の実績以上刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催灯により、積極的に公開・提供する。また、研究所の研究・業務棟を広報するためホームページの充実を図り、ホームページアクセス件数を前期中期計画の年度平均以上確保する。

【事業名称】	『無形文化遺産研究報告』・『無形民俗文化財研究協議会報告書』の刊行（Ⅰ６（２）①）

【事業概要】
無形文化遺産部スタッフによる業績に基づく論考・報告・資料紹介等を内容とする『無形文化遺産研究報告』及び民俗文化財保護行政担当者、無形民俗文化財保存関係者、研究者の参加を得て開催する無形民俗文化財研究協議会の事例報告・総合討議を内容とする『無形民俗文化財研究協議会報告書』を刊行する。

【担当部課】	無形文化遺産部	【事業責任者】	部長　宮田繁幸

【スタッフ】
高桑いづみ、飯島満、俵木悟、鎌倉惠子（以上、無形文化遺産部）
大島暁雄、深津（福岡）裕子、森下愛子、服部比呂美（以上　客員研究員）
埋忠美沙（アシスタント）

【年度実績概要】
『無形文化遺産研究報告』第２号は以下の内容で刊行し、関係者に配布した。
「無形文化遺産保護における国際的枠組み形成２」宮田繁幸、「「土型」の保存とその公開について―伝統的陶芸芸術の公開と普及の方法―」森下愛子、「染織工芸技術の変遷―葛布の製作技法と用途を事例として―」深津裕子、「国立音楽大学附属図書館寄贈　竹内道敬旧蔵音盤目録（２）」飯島満、「東京文化財研究所無形文化遺産部所蔵　歌舞伎舞台写真目録―昭和―」梅忠美沙、「世阿弥自筆本の節付けを考える―「難波梅」から「盛久」・「江口」まで―」高桑いづみ、「庄内地方における雛祭りの飾り物―雛菓子と押絵雛菓子―」服部比呂美、「無形民俗文化財の「変化」を考える―特に文化財指定との関係で―」大島暁雄、「〔聞書き〕人形浄瑠璃文楽の裏方―囃子の世界を中心に―」鎌倉惠子
『第２回無形民俗文化財研究協議会報告書』は以下の内容で刊行し、関係者に配布した。
テーマ「市町村合併と無形民俗文化財の保護」：
Ⅰ序にかえて
Ⅱ趣旨説明
Ⅲ報告
１木村弘樹「市町村合併による民俗芸能の保護と継承―相模原市内の一人立ち三匹獅子舞を中心に―」
２千田和文「市町村合併と保存会活動―盛岡市の事例を中心に―」
３寺田昭士「町村合併と無形民俗文化財の保存と活用―とくに学校教育において―」
４戸田剛「市町村合併と民俗芸能の伝承―「合併から政令市へ」浜松市を例に―」
５須田弘宗「市町村合併が綾子舞の保存振興に与えた影響」
Ⅳ総合討議
Ⅴ参考資料
Ⅵアンケート集計結果
Ⅶあとがき

【実績値】
刊行数　　２件　（１）
配布部数　1014 部（『無形文化遺産研究報告』594 部、『無形民俗文化財研究協議会報告書』420 部）（２）

【備考】
１　『無形文化遺産研究報告』08.03・『無形民俗文化財研究協議会報告書』08.03
２　配布先リスト

（様式２）

自己点検評価調書

№.　２２２０

１．定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性			
判定	A	A	A			
備考						

２．定量的評価

観点	刊行数					
判定	A					
備考						

３．実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	『無形文化遺産研究報告』：昨年度より、報告書名を『芸能の科学』から左記に改め、第２号を刊行した。誌名の変更からも明らかなように、対象を芸能に限定することなく、無形の文化財全般に広げることとなった。本号においても、無形の文化財に関する論考や報告、資料紹介等々に加え、海外での無形文化遺産保護に関わる動向をも含まれており、幅広い内容の報告書となった。本誌は、将来の無形文化遺産全般の保護行政や研究に資する報告書となることをめざしているが、その目的に適うものとなっている。 『無形民俗文化財研究協議会報告書』：当研究所でおこなった無形民俗文化財に関する研究協議会の報告書で、会場での研究報告や総合討議の様相を掲載したものである。今後もこれまでの研究を踏まえながら、協議会をおこない、報告書の刊行を見る予定である。 以上を総合的に判断して、Ａと判定した。

４．当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	両誌ともに、年度当初の計画通り、年１回の刊行がなされており、目的を順調に達成した。今後もこのペースの維持をめざす。そして「無形文化遺産研究報告」は、内外の無形文化遺産保護行政担当者や研究者の要望を視野に入れた研究誌として、内容の充実を図ることとする。「無形文化財研究協議会報告書」は、今後も協議会の内容を掲載するものとして、刊行を続けてゆくこととなる。

（様式１）　　No.　２２２１

業務実績書

中期計画の項目（Ⅰ６（２））	文化財に関する調査・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を平成１７年度の実績以上刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催等により、積極的に公開・提供する。また、研究所の研究・業務等を広報するためホームページの充実を図り、ホームページアクセス件数を前期中期計画期間の年度平均以上確保する。

【事業名称】	『保存科学』　４７号の出版（Ⅰ６（２）①）

【事業概要】
保存修復科学センター・文化遺産国際協力センターで行われた文化財の保存・修復に関する調査・研究に基づく資料の作成・公開を目的とし、年１回研究論文集『保存科学』を刊行する。様々な文化財の科学的調査結果や基礎研究に関する論文、受託研究に関する研究報告・修復処置概報などの活動報告を掲載する。また、より一層の研究成果の公開につとめるため、『保存科学』掲載論文の電子化（画像ファイル化）を行い、最終的にインターネット上での全文掲載による公開を行う。

【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	保存修復科学センター長　　石﨑　武志

【スタッフ】
川野邊渉（保存修復科学センター副センター長）、清水真一（文化遺産国際協力センター長）、木川りか（編集担当）

【年度実績概要】
保存修復科学センター長、副センター長、文化遺産国際協力センター長、東京国立博物館文化財保存修復課長・神庭信幸氏、東京藝術大学大学院美術研究科教授・稲葉政満氏の５名からなる編集委員会によって編集を行った。
平成 19 年度は、25 件の研究論文・報告を掲載した『保存科学』第 47 号を発行した。論文題目を以下に記す。

1. 高松塚古墳石室解体時の壁画保存のための温湿度環境の制御
2. Moisture Characteristic Curves of Tuff Breccia Stone
3. 高松塚古墳発掘・石室解体作業に伴う取合部・断熱覆屋使用木材等の防カビ対策：ＤＤＡＣの検討と施工
4. 蛍光Ｘ線分析による国宝吉祥天像の彩色材料調査
5. 桃山文化期の輸入漆塗装の流通と使用に関する調査
6. 元興寺五重小塔の外観塗装材料に関する調査
7. 石水博物館千歳文庫内の温湿度解析
8. バーミヤーン仏教壁画の材質分析(3)－ガスクロマトグラフィ／質量分析法を使用した有機物の分析：Ｂ(d)窟－
9. 敦煌莫高窟第 285 窟壁画に使用された彩色材料の非接触分析
10. 敦煌莫高窟第 53 窟の窟内環境－温湿度実測調査と気流解析－
11. カンボジア・タ・ネイ遺跡における蘚苔類の繁茂と砂岩の風化
12. 高松塚古墳発掘・解体作業に伴う生物調査の概要について
13. キトラ古墳の微生物等の状況報告(2007)
14. キトラ古墳保護覆屋内の環境について(3)－カビ点検報告記録の解析－
15. ガス電子増幅フォイルを用いた文化財のＸ線透過撮影のための検出器の開発Ⅱ
16. 文化財の透過Ｘ線撮影における蛍光増感スクリーンの特性
17. ファイバー送受光型分光光度計による平面文化財資料の反射スペクトル測定における誤差に関する考察
18. コンクリート壁面における付着真菌の累積挙動
19. 静岡県立美術館における温熱環境の測定Ⅱ
20. 文化財保護施設におけるジクロロボス蒸散殺虫剤の使用について
21. 重要文化財八窓庵中柱の修復
22. バーミヤーン仏教壁画の保存修復(3)－Ⅰ窟およびＮ(a)窟における保存修復
23. 我が国の文化遺産国際協力事業の動向－財源別に整理した事業実績の集計－
24. 展示公開施設の館内環境調査報告－平成 18 年度－
25. 25 年目を迎える保存担当学芸員研修

【実績値】
刊行物刊行数　　1 件
印刷部数　700 部：　　配布部数　　585 部

【備考】
1. 『保存科学』第 47 号、08.3
2. 　配布先リスト

（様式２）

自己点検評価調書

No. ２２２１

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

２．定量的評価

観点	発行部数	刊行数				
判定	A	A				
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	論文、報告数は25件、全ページ数261ページとなり、多くの報文、報告を掲載できた。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	論文、報告の査読および出版作業を順調に行うことができた。

（様式１）　　No.　２２２２

業務実績書

中期計画の項目（Ⅰ６（２））	文化財に関する調査家・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を平成 17 年度の実績以上刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催灯により、積極的に公開・提供する。また、研究所の研究・業務棟を広報するためホームページの充実を図り、ホームページアクセス件数を前期中期計画の年度平均以上確保する。

【事業名称】	第３０回文化財の保存・修復に関する国際研究集会報告書の刊行（Ⅰ６（２）①）

【事業概要】
東京文化財研究所では昭和 52 年から文化財の保存・修復に関する国際研究集会を行っている。平成 18 年は無形文化遺産部が担当し、「無形文化遺産の保護―国際的協力と日本の役割―」と題して 2 月 14 日から 3 日間行った。平成 19 年度はその報告書を刊行する。

【担当部局】	無形文化遺産部	【事業責任者】	部長　宮田繁幸

【スタッフ】
鎌倉惠子、高桑いづみ、飯島満、俵木悟（以上無形文化遺産部）

【年度実績概要】
下記の内容の報告書を刊行した。
刊行に当たって　鈴木規夫（東京文化財研究所）
基調講演
1　日本の無形文化遺産保護と無形文化遺産保護条約　宮田繁幸（東京文化財研究所）
2　ユネスコ無形文化遺産保護条約　―その採択（2003）から第１回政府間委員会開催（2006.11）まで　愛川紀子（ユネスコ）
セッションⅠ：各国の無形文化遺産保護の現状と課題Ⅰ
中国の無形文化遺産保護の国際的重要性　白庚勝（中国・中国民間文芸家協会）
日本の無形文化遺産―古典芸能の伝承と将来　飯島満（東京文化財研究所）
セッションⅡ：各国の無形文化遺産保護の現状と課題Ⅱ
無形文化遺産の保護と人間文化財：経験と挑戦　イム・ドンヒ（韓国・東国大学）
日本における『無形文化財』の保護の現状と課題―工芸技術を中心として―　佐々木正直（文化庁伝統文化課）
インドネシアの無形文化遺産の保護：システム、計画、活動と問題　ガウラ・マンチャチャリタディプラ（インドネシア・文化専門家）
セッションⅢ：各国の無形文化遺産保護の現状と課題Ⅲ
日本の無形民俗文化財の保護　菊池健策（文化庁伝統文化課）
フィリピン：無形文化遺産の保護について　ヘスス・ペラルタ（フィリピン・国家文化芸術委員会）
近年のヴェトナムにおける無形文化遺産の保護とコミュニティの関与　グウェン・キム・ズン（ヴェトナム・文化情報省文化遺産部）
セッションⅣ：国際的協力における日本の経験
伝統芸能の保護と映像記録の役割　福岡正太（国立民族学博物館）
無形文化遺産とコミュニティのキャパシティビルディング　大貫美佐子（財団法人ユネスコ・アジア文化センター）
東京文化財研究所の無形文化遺産保護のための取り組み　俵木悟（東京文化財研究所）

【参考資料】討論・シンポジウムプログラム・発表者一覧・組織委員会メンバー・無形文化遺産条約全文

【実績値】
報告書刊行数　1 件
配布部数　561 件

【備考】
1　第 30 回文化財の保存・修復に関する国際研究集会　「無形文化遺産の保護―国際的協力と日本の役割―」　08.03
2　配布先リスト

（様式２）

自己点検評価調書

№.　２２２２

１．定性的評価

観点	適時性	発展性				
判定	A	A				
備考						

２．定量的評価

観点	報告書刊行数	配布件数				
判定	A	A				
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	事業の結果を総合的に評価し、Aと判断した。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初の計画通り進捗した

（様式１）　　No.　２２２３

業務実績書

中期計画の項目（Ⅰ６（２））	文化財に関する調査・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を平成１７年度の実績以上刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催等により、積極的に公開・提供する。また、研究所の説明・業務等を広報するためホームページの充実を図り、ホームページアクセス件数を前期中期計画期間の年度平均以上確保する。

【事業名称】	研究報告書、年報、研究論文集、図録等の刊行(Ⅰ６（２）①)

【事業概要】
研究報告書、紀要、研究論文集、図録等の刊行

【担当部課】	奈良文化財研究所	【事業責任者】	所長　田辺征夫
【スタッフ】			

【年度実績概要】
(紀要等)　『奈良文化財研究所紀要 2007』2007 年 6 月、3,000 部
『奈良文化財研究所概要』2007 年 6 月、4,500 部
(ニュース) 『奈文研ニュース』No.25 号、2007 年 6 月、3,000 部、『奈文研ニュース』No.26 号、2007 年 9 月、3,000 部
『奈文研ニュース』No.27 号、2007 年 12 月、3,000 部、『奈文研ニュース』No.28 号、2008 年 3 月、3,000 部
『埋蔵文化財ニュース』130 号(宮中儀礼の再現・復興による文化遺産の活用)、2008 年 3 月、3,200 部、『埋蔵文化財ニュース』131 号(高松塚古墳)、2008 年 3 月、3,500 部、『埋蔵文化財ニュース』132 号(台帳の利活用法と土器の洗浄法)、2008 年 3 月、3,500 部、『埋蔵文化財ニュース』133(2006 年度埋蔵文化財関係統計資料)号、2008 年 3 月、3,500 部、
(研究報告書、研究論文集等)
『平安時代庭園に関する研究１』2007 年 10 月、300 部、
『古代豪族居宅の構造と機能』2007 年 12 月、1,000 部
『遺跡の教育面に関する活用―平成 18 年度遺跡整備・活用研究集会(第１回)報告書―』2008 年、1 月、600 部
『高知県中芸地区森林鉄道遺産調査報告書』(編集：奈良文化財研究所　発行中芸地区森林鉄道を保存・活用する会)、2008 年 3 月、500 部
『遺跡整備調査報告―管理運営体制および整備活用手法に関する類例調査―』2008 年 3 月、1,000 部
『日韓文化財論集Ⅰ』(奈良文化財研究所学報第 77 冊)2008 年 3 月、600 部
(史料等)　『重要文化財建造物現状変更説明 1968―1970(本文編)』2007 年 8 月、500 部
『重要文化財建造物現状変更説明 1968―1970(図版編)』2007 年 8 月、500 部
『重要文化財建造物現状変更説明　1965―1967(本文編)』2008 年 2 月、500 部
『重要文化財建造物現状変更説明　1965―1967(編)図版』2008 年 2 月、500 部
『飛鳥藤原宮発掘調査出土木簡概報(二十一)』2007 年 11 月 1,200 部
『平城宮発掘調査出土木簡概報(三十八)』2007 年 11 月 1,000 部
(図録、カタログ等)
『キトラ古墳壁画四神玄武』(飛鳥資料館図録第 46 冊)2007 年 3 月、4,000 部
『重要文化財指定記念　奇偉荘厳　山田寺』(飛鳥資料館図録第 47 冊)2007 年 10 月、4,000 部
『地下の正倉院展―平城宮木簡の世界―』2007 年 10 月、10,000 部、
『「とき」を撮す―発掘調査と写真―』(飛鳥資料館カタログ第 18 冊) 2007 年、7 月、2,000 部
『飛鳥の考古学 2007』(飛鳥資料館カタログ第 19 冊) 2008 年、1 月、2,000 部
(パンフレット)
『平城宮跡東院地区中枢部の調査　平城第 421 次調査』2007 年、9 月、2,000 部
『平城宮跡東院地区中枢部の調査　平城第 423 次調査』2008 年、1 月、2,000 部
『藤原宮大極殿院南門の調査(飛鳥藤原 148 次調査現地説明会資料』2007 年 9 月 7,000 部
『石神遺跡の調査　石神遺跡第 20 次調査現地説明会資料』2007 年 12 月 3,000 部
『甘樫丘東麓遺跡　(飛鳥藤原第 151 次)現地説明会資料』2008 年 3 月 7,000 部

【実績値】
新聞、雑誌等への寄稿および資料提供数、2,886 件

【備考】

（様式２）

自己点検評価調書

№.　２２２３

１．定性的評価

観点	適時性	継続性	正確性			
判定	A	A	A			

備考
適時性：調査研究の実施状況
継続性：紀要、ニュース等の継続発行
正確性：調査報告書の調査データ

２．定量的評価

観点	紀要等刊行数	研究報告書、研究論文集刊行数	図録、史料等の刊行数	新聞、雑誌等への寄稿および情報提供数		
判定	A	A	A	A		

備考

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	年次ごとの調査研究事業の報告である紀要等２点、ニュース２種(８点)、研究報告書・研究論文集７点、史料等６点、展示図録・カタログ５種点、パンフレット５点、合計３２点を刊行でき、研究成果を順調に刊行できたことで、A と判定した。次年度も、本年度にまして、多様な研究成果、特に継続的な調査研究の成果を、専門家だけでなく、一般向けにも分かりやすいような形で刊行できるように努力したい。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	紀要、ニュース、研究報告書、研究論文集、図録、史料等の刊行は順調に実施している。

（様式１）　　No.　２２２４

業務実績書

中期計画の項目（Ⅰ６（２））	文化財に関する調査・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を平成１７年度の実績以上刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催等により、積極的に公開・提供する。また、研究所の研究・業務等を広報するためホームページの充実を図り、ホームページアクセス件数を前期中期計画期間の年度平均以上確保する。

【事業名称】	第31回文化財の保存・修復に関する国際研究集会（Ⅰ６（２）②）

【事業概要】
文化財はそれを取り巻く環境により様々な影響を受ける。ラスコー洞窟や高松塚古墳のカビ等発生の一つの要因は、壁画周囲の湿度が高かったことにある。これらの問題に対処するためには、劣化をひきおこす微生物への対策のみならず、周囲の温湿度や文化財に含まれる水分量など数多の環境要素の問題点を明確にすることが重要である。
今回の国際研究集会では、「文化財を取り巻く環境の調査と対策」をテーマに、様々な調査手法と評価法について、最新の研究成果をもとに討議し、文化財を取り巻く環境の調査と対策について詳細に検討する。

【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	保存修復科学センター長　石﨑　武志

【スタッフ】
佐野千絵、犬塚将英、吉田直人、木川りか、早川泰弘（以上、保存修復科学センター）、三浦定俊（副所長）

【年度実績概要】
海外から７名、国内から８名の研究者による講演があった（2008 年２月 5-7 日、於：地下セミナー室、参加者 74 名）。総合討議で、文化財保存のための経験交流や協力体制についての意見交換を行った。回収率 46 %、満足度 97 %。

環境変動と野外遺跡の成立と保存－中国敦煌莫高窟を例として－　福田正己（アメリカ、アラスカ大学）
ラスコー洞窟：その保存の困難さ　Isabelle Pallot-Frossard（フランス、歴史記念物研究所）
韓国百済王朝　武寧王陵の保存に関する地質工学的研究　徐　萬哲（韓国、国立公州大学）
高松塚古墳墳丘部の熱水分特性調査と冷却　石﨑武志
文化財保存計画策定のための環境計測　Vinod Daniel（オーストラリア、オーストラリア博物館）
ラスコー洞窟：微生物活動のモニタリング　Genevieve Orial（フランス、歴史記念物研究所）
高松塚古墳・キトラ古墳石室の微生物調査：漆喰壁画の生物劣化にかかわる原因究明の一里塚　杉山純多（東京大学名誉教授）木川りか
高松塚古墳の石室解体過程における温湿度環境の制御　小椋大輔（京都大学）犬塚将英
高松塚古墳墳丘部の原位置土質特性と安定解析　三村　衛（京都大学）
壁画／絵画の診断と保存のための非接触調査法　Mauro Bacci（イタリア、イタリア電磁気学研究所）
音波による石造文化財の劣化評価　高妻洋成（奈良文化財研究所）
フマユーン廟赤砂岩の物性に対する気象の影響とその解析　Rudolf Plagge（ドイツ、ドレスデン工科大学）
建造物部材でのカビ発生率の予測解析　John Grunewald（ドイツ、ドレスデン工科大学）/発表　Rudolf Plagge
ラスコー洞窟内の微気象変化とその解析　Delphine Lacanette（フランス、ボルドー大学）

【実績値】
海外から招聘の講演者８名（発表論文数９件）
国内から招聘の講演者７名（発表論文数５本）

【備考】
第３１回文化財の保存および修復に関する国際研究集会　ファーストサーキュラー、セカンドサーキュラー、プレプリント
ファーストサーキュラー配布先リスト
アンケート集計表

（様式２）

自己点検評価調書

№.　２２２４

１．定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

２．定量的評価

観点	開催回数	印刷物数				
判定	A	A				
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	高松塚古墳保存のための解体が終了した直後の非常に適時性の高いプログラムで、発表内容と網羅性について評価が高かった。発表件数、発表人数、招聘対象国の選定などいずれも適しており、今後の研究交流体制など発展性が高かった。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順　調	いずれも高い水準で実施でき、順調と判断した。

（様式１）　　No.　２２２５

業務実績書

中期計画の項目 （Ⅰ６（２））	文化財に関する調査・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を平成 17 年度の実績以上刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催等により、積極的に公開・提供する。また、研究所の研究・業務等を広報するためホームページの充実を図り、ホームページアクセス件数を前期中期計画期間の年度平均以上確保する。

【事業名称】	平成 19 年度オープンレクチャー（Ⅰ６（２）②）

【事業概要】
美術史研究の成果を一般に公表することを目的とする。

【担当部課】	企画情報部	【事業責任者】	企画情報部長　中野照男

【スタッフ】
勝木言一郎、山梨絵美子、塩谷純、田中淳、津田徹英、綿田稔、皿井舞、江村知子（以上、企画情報部）

【年度実績概要】
企画情報部では、研究成果を広く公表するためにオープンレクチャーを毎年秋に開催しており、本年で 41 回目を迎えた。昨年度同様、今年度も金曜日と土曜日の午後、2 日間連続で開講し、聴講者の便宜を図るように努めた。今回も昨年度に引き続き「人とモノの力学」をテーマに掲げた。個々の講演内容は以下の通りである。なお、この講座は、上野の山文化ゾーン連絡協議会が主催して毎年秋に開く「上野の山文化ゾーンフェスティバル」の講演会シリーズのプログラムとしても企画されている。
今回は 2 日間でのべ 276 人の参加があり、参加者にアンケートを実施したところ、166 人から回答を得た（回収率：60.1%）。結果は、「たいへん満足した」が 105 人、「概ね満足した」が 60 人、「不満が残った」が 5 人、したがって回答者の 99%が満足感を得たことがわかった。

第 1 日目：2007 年（平成 19）11 月 2 日（金）午後 1:30～4:30、東京文化財研究所セミナー室
「光琳の目と手」　江村知子（東京文化財研究所）
「矢代幸雄の琳派観」中部義隆（大和文華館学芸部次長）

第 2 日目：2007 年（平成 19）11 月 3 日（土）午後 1:30～4:30、東京文化財研究所セミナー室
「矢代幸雄と美術研究所」　山梨絵美子（東京文化財研究所）
「黒田清輝のフランス体験―芸術家村グレーから黒田記念館へ」荒屋鋪透（ポーラ美術振興財団ポーラ美術館）

【実績値】
参加者数：276 人
満足度　：99%（回収率 60.1%）

【備考】
アンケート集計表

（様式２）

自己点検評価調書

№.　２２２５

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考						

２．定量的評価

観点	参加者数	満足度				
判定	A	A				
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財に関する調査・研究に基づく成果・新発見を、時宜に適応しながら、公表することができ、その参加者数も満足度も目標値を満たしたので、Aと判断した。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初の計画通り、進捗した。次年度以降も文化財に関する調査・研究に基づく成果・新発見を、公開講演というかたちで開催していきたい。

（様式１）　　No.　２２２６

業務実績書

中期計画の項目 （I6（2））	文化財に関する調査・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を平成１７年度の実績以上刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催等により、積極的に公開・提供する。また、研究所の研究・業務等を広報するためホームページの充実を図り、ホームページアクセス件数を前期中期計画期間の年度平均以上確保する。

【事業名称】	公開講演会、現地説明会等の開催（I6（2）②）

【事業概要】
文化財に関する調査・研究に基づく成果について、公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催等により、積極的に公開・提供する。

【担当部課】	管理部文化財情報課、管理部業務課	【事業責任者】	文化財情報課長　山田耕一、業務課長　東博信

【スタッフ】
永井あつ子、桑原隆佳、今西　康益、飯田　信男、石田　義則、井手　真二

【年度実績概要】
Ⅰ．公開講演会等
１．第１００回公開講演会　　平成１９年６月１６日（土）　　参加者数　２３０人
演 題　・　講演者　「阿倍山田道と古代の道路」　奈良文化財研究所長　田辺征夫
「西大寺伽藍に迫る－最新の発掘調査成果から－」　都城発掘調査部　林　正憲
「年輪年大学とデジタル画像」　埋蔵文化財センター　大河内隆之
ｱﾝｹｰﾄ結果＝回収数１５３人・回収率６６．５％：満足度Ａ＝１５３人(100%)/Ｂ＝０人(0%)/Ｃ＝０人(0%)
２．第１０１回公開講演会　　平成１９年１０月２０日（土）　　参加者数　２２０人
演 題　・　講演者　「版築の話」　奈良文化財研究所長　田辺征夫
「キトラ古墳壁画の保存」　埋蔵文化財センター　降幡順子
「文化遺産としての風景の保存」　文化遺産部　平澤　毅
ｱﾝｹｰﾄ結果＝回収数１５０人・回収率６８．２％：満足度Ａ＝１４７人(98%)/Ｂ＝３人(2%)/Ｃ＝０人(0%)
３．飛鳥資料館特別講演会　　平成１９年１０月２８日（日）　　参加者数６０人
演 題　・　講演者　「山田寺の発掘調査と重要文化財指定」　文化庁主任文化財調査官　土肥　孝
ｱﾝｹｰﾄ結果＝回収数４９人・回収率８１．７％：満足度Ａ＝４８人(98%)/Ｂ＝０人(　%)/Ｃ＝１人(２%)
４．飛鳥資料館特別講演会　　平成１９年１１月３日（土）　　参加者数７４人
演 題　・　講演者　「山田寺の建築を再考する」　元奈良国立文化財研究所長　鈴木嘉吉
ｱﾝｹｰﾄ結果＝回収数５８人・回収率７８．４％：満足度Ａ＝５８人(100%)/Ｂ＝０人(0%)/Ｃ＝０人(0%)
Ⅱ．発掘調査現地説明会等
１．平城第４２１次(東院地区中枢部)発掘調査　　平成１９年９月１日（土）
参加者数　７５０人　報告者　山本　崇　調査面積　１，５６０㎡
ｱﾝｹｰﾄ結果=回収数２５２人・回収率３３．６％　満足度Ａ＝１４５人(57.5%)／Ｂ＝１０２人(40.5%)／Ｃ＝５人(2.0%)
２．飛鳥藤原第１４８次(藤原宮大極殿院南門)発掘調査　　平成１９年９月８日（土）
参加者数　１，０７３人　報告者　高田　貫太、箱崎　和久　調査面積　１，５６０㎡
ｱﾝｹｰﾄ結果=回収数３０９人・回収率２８．８％　満足度Ａ＝１７７人(57.3%)／Ｂ＝１２７人(41.1%)／Ｃ＝５人(1.6%)
３．飛鳥藤原第１５０次(石神遺跡第２０次)発掘調査　　平成１９年１２月１５日（土）
参加者数　８６７人　報告者　黒坂　貴裕　調査面積　約４００㎡
ｱﾝｹｰﾄ結果=回収数２０４人・回収率２３．５％　満足度Ａ＝１１８人(57.8%)／Ｂ＝８４人(41.2%)／Ｃ＝２人(1.0%)
４．平城第４２３次(東院地区中枢部)発掘調査　　平成２０年１月１９日（土）
参加者数　８１９人　報告者　浅野　啓介　調査面積　１，３７９㎡
ｱﾝｹｰﾄ結果=回収数２３０人・回収率２８．1%　満足度Ａ＝１４３人(62.2%)／Ｂ＝８６人(37.4%)／Ｃ＝１人(0.4%)
５．飛鳥藤原第１５１次（甘樫丘東麓遺跡）発掘調査　　平成２０年３月２９日（土）
参加者数　２，１００人　報告者　豊島　直博　調査面積　９５０㎡
６．平城第４２９次(東院朝堂院東方官衙地区)発掘調査　　平成２０年３月３０日（日）
参加者数　４５３人　報告者　今井　晃樹　調査面積　１，３１４㎡
ｱﾝｹｰﾄ結果=回収数９０人・回収率１９．９％　満足度Ａ＝５３人(53.0%)／Ｂ＝３７人(37.0%)／Ｃ＝０人(0.0%)

【実績値】
Ⅰ 公開講演会等 年４回：参加者延数５８４人　回収数４１０人・回収率７０．２％：
Ａ大変満足である：４０６人(99.0%)／Ｂおおむね満足である：３人(0.7%)／Ｃあまり満足でない：１人(0.3%)
Ⅱ 発掘調査現地説明会等　年６回：参加者延数６，０６２人　内ｱﾝｹｰﾄ実施回数５回：参加者延数３，９５２人　回収数１，０８５人　回収率２７．５％：
Ａ大変満足である：６３６人（58.6%）／ Ｂおおむね満足である：４３６人（40.2%）／ Ｃあまり満足でない：１３人（1.2%）

【備考】

（様式２）

自己点検評価調書

№.　２２２６

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		

備考
適時性：発掘調査等研究成果の適時適切な公開
独創性：公開内容の新規性及び卓越性
発展性：遺跡等の重要性の確認と社会への影響性
継続性：研究成果の継続的な社会復元

２．定量的評価

観点	開催回数	参加者数	参加者満足度			
判定	A	A	A			

備考
開催回数
公開講演会：年４回、現地説明会等：年６回
参加者数
公開講演会：年延３５０人以上、現地説明会：年延３，０００人以上
参加者満足度
現地説明会：８０％以上

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	公開講演会については、年４回実施し、発掘調査現地説明会等については、予定した回数を超える６回を実施し、いずれも多数の参加者があった。これらの参加者に対し行ったアンケートでは、公開講演会で９９．７％、発掘調査現地説明会等で９８．８％の「大変満足である」、「おおむね満足である」という結果を得ている。 これらの結果を総合的に判断して、Ａと認めたものである。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	公開講演会、現地説明会等の開催事業は、開催回数、参加者数ともに、従来の水準を維持し、順調に実施できたと考える。 今後もこのペースを維持しつつ、調査研究の成果に基づく講演、現地説明会等の内容及び配付資料の充実、アンケート調査による参加者ニーズの把握等に力を注ぎ、さらに参加者数の増加と満足度の向上に努めたい。

（様式１）　　No.　２２２７

業務実績書

中期計画の項目 （Ｉ６（２）③）	文化財に関する調査・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を平成１８年度の実績以上刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催等により、積極的に公開・提供する。また、研究所の研究・業務等を広報するためホームページの充実を図り、ホームページアクセス件数を前期中期計画期間の年度平均以上確保する。

【事業名称】	ホームページの運用（Ｉ６（２）③）

【事業概要】
研究所の研究・業務などの広報活動の一環として、ホームページの運用を充実させる。

【担当部課】	企画情報部	【事業責任者】	情報システム研究室長　勝木言一郎

【スタッフ】
綿田稔，江村知子，中村明子（以上、企画情報部），横山隆史（管理部 LAN 委員），俵木悟（無形文化財部 LAN 委員），吉田直人，加藤雅人（以上、保存修復科学センターLAN 委員），二神葉子（文化遺産国際協力センターLAN 委員）

【年度実績概要】
１．ホームページの運用
東京文化財研究所のホームページは、研究所における情報発信機能の一翼を担う重要なメディアであり、また文化財研究のデジタル・アーカイブとしての役割を果たす。とくに平成 19 年度は、『活動報告』（日本語版・英語版）ページの新設、検索エンジンの導入、更新回数の増加など、ホームページの充実を図った。
平成 19 年度のホームページアクセス件数は 1,526,409 件に達し、平成 18 年度に比べ、約 17 万件増加した。

【実績値】
ホームページアクセス件数：1,526,409 件

【備考】

（様式２）

自己点検評価調書

№.　２２２７

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

２．定量的評価

観点	ホームページアクセス件数					
判定	A					
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	ホームページの運用については、ホームページアクセス件数の飛躍的な増加が適時性、独創性、発展性、効率性、継続性、正確性の向上を裏付ける結果だと判断した。したがって実績の総合評価も十分な成果が認められると結論した。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	ホームページの運用については、ホームページが研究所の広報活動の一翼を担うとともに、かつ文化財研究のデジタル・アーカイブとして多角的な情報発信を行ってきたことがホームページアクセス件数の飛躍的な増加に結びついた。こうした実績から、当年度における中期計画の実施状況は順調であると判断した。

（様式１）　　No.　２２２８

業務実績書

中期計画の項目（Ⅰ6（2））	文化財に関する調査・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を平成 17 年度の実積以上刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催等により、積極的に公開・提供する。また、研究所の研究・業務等を広報するためホームページの充実を図り、ホームページアクセス件数を前期中期計画期間の年度平均以上確保する。

【事業名称】	ホームページアクセス件数の前期中期計画期間の年度平均以上の確保（Ⅰ 6（2）③）

【事業概要】
研究所の事業・研究成果をはじめ、施設・案内など様々な広報をしているホームページであり、常に拡充を図っている。社会への広報の目安となるアクセス件数を把握し、より一層の情報提供に務めるものである。

【担当部課】	管理部文化財情報課	【事業責任者】	課長　山田 耕一

【スタッフ】
太田 仁 ほか１名

【年度実績概要】
今年度は新たな技術を導入することはなかったものの、サーバをダウンさせることもなく、安定して運用できた。その結果として、研究所として常に最新情報を公表し、現地説明会をはじめとする催しの集客に貢献した。
また、機関リポジトリを公開し、書籍以外での研究所業績の普及に努め、コンスタントに高いアクセス件数が維持できている。

【実績値】
アクセス件数： 923,466 件

【備考】

（様式２）

自己点検評価調書

No.　２２２８

１．定性的評価

観点	適時性	効率性	継続性			
判定	A	A	A			

備考
適時性：データベースを含む文化財情報を公開、ホームページにより最新の文化財情報を提供
効率性：データベース及びホームページにより文化財情報への効率的なアクセスを提供
継続性：データベース及びホームページの情報を拡充

２．定量的評価

観点	アクセス件数					
判定	A					

備考
前中期計画中の平均ホームページアクセス件数：　368,000 件

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	ホームページについては、安定した運用ができ、アクセス件数についても平均アクセス件数の倍以上のアクセスを得ることができているので、これらの結果を総合的に判断して A と評価した。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	年度を通じて、安定してホームページを公開できた。今後も積極的に情報発信を続けたい

（様式１）　　No.　２２２９

業務実績書

中期計画の項目（Ⅰ６（３））	黒田記念館、平城宮跡資料館、藤原宮跡資料館、飛鳥資料館については、研究成果の公開施設としての役割を強化する観点から展示を充実させ、調査・研究成果の内容を広く一般に理解を深めてもらうことに資する。入館者数については、前期中期計画期間の年度平均以上確保する。

【事業名称】	黒田記念館における作品の展示公開（Ⅰ６（３））

【事業概要】
当研究所は、黒田清輝の芸術を顕彰するために黒田記念館において作品や資料、研究成果を公開するとともに、地方文化の振興に資するために、昭和 52 年からの事業として「近代日本洋画の巨匠　黒田清輝」展を年１回地方において共催している。

【担当部課】	企画情報部	【事業責任者】	近現代視覚芸術研究室長　田中淳

【スタッフ】
中野照男、山梨絵美子、塩谷純、津田徹英、綿田稔、（以上、企画情報部）

【年度実績概要】
① 黒田記念館における作品の展示公開：毎週木・土曜日の午後１時から４時まで、無料で一般公開した。また「上野の山文化ゾーンフェスティバル」の期間中、平成１９年１０月３０日から１１月４日まで、特別公開を行った。
総入館者数　13,707 人（平成 19 年 4 月 5 日から平成 20 年 3 月 29 日まで）、公開日数：90 日、一日平均：152 人
② 平成 20 年 2 月 22 日から 3 月 15 日まで、来館者にアンケートを実施した。1,502 人の来館者に対して、598 人から回答を得た（来館者数の 39,8％）。回答は、「満足した」及び「おおむね満足した」98,5％、「不満が残った」6 人（0.4%）、その他であり、アンケート回答の 98,5％が満足感を得たことになる。
③ 今年度は記念館 2 階の一室を会場に、「特集展示　写された黒田清輝」と題して、平成 18 年度に寄贈をうけた黒田清輝関係写真等から 23 点を選び、原寸大に複製した画像を展示公開した（会期：2007 年 11 月 15 日から 08 年５月１７日まで）。
④ 平成 19 年度共催展
会場：平塚市美術館
会期：2007（平成 19）年 7 月 21 日（土）から９月２日（日）
主催：東京国立博物館　東京文化財研究所　平塚市美術館
開催日数：38 日　　入場者：12,746 人
陳列点数：油彩・パステル画 85 点、素描 62 点、写生帖 17 冊、書簡 4 通、日記 5 冊、参考出品 2 点、記録写真 16 点（以上、黒田記念館所蔵作品）　その他油彩画 1 点、書簡 1 通を特別出品した。会期中の平成 19 年 7 月 28 日（土）、会場出口において来館者にアンケート調査を実施し、161 人から回答を得た。（入館者数 279 人に対して、回収率 57,7％）。満足度として「満足」、「おおむね満足」の回答が、100%をしめた。

【実績値】
黒田記念館入館者数：13,707 人　　入館者の満足度：98.5%
共催展　入場者数：12,746 人　　入場者の満足度：100%

【備考】
黒田記念館　アンケート、同集計表
「特集陳列　写された黒田清輝」のための入館者配布用パンフレット
共催展　アンケート集計表

（様式２）

自己点検評価調書

№.　２２２９

１．定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	正確性		
判定	A	A	A	A		
備考						

２．定量的評価

観点	黒田記念館入館者数	同館入館者満足度	共催展入場者数	同入場者満足度		
判定	A	A	A	A		
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	黒田記念館における公開、共催展開催、いずれも評価できる内容であった。黒田記念館においては、今年度、特集陳列として「写された黒田清輝」を催した。これは、寄贈資料の公開と同時に、黒田清輝に関する調査研究、及び脆弱なオリジナル写真の保護を目的にした画像複製展示という新しい試みであり、高く評価できると考える。このような特集陳列を次年度においても試みたい。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画通り、進捗したと考える。次年度以降、作品等の資料の保存に留意しながら、公開を促進していきたい。

（様式１）　　No.　２２３０

業務実績書

中期計画の項目 （Ⅰ６(３)) （Ⅰ６(５))	黒田記念館、平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館については、研究成果の公開施設としての役割を強化する観点から展示を充実させ、調査・研究成果の内容を広く一般に理解を深めてもらうことに資する。 入館者については、前期中期計画の年度平均以上確保する。 奈良県の「平城遷都１３００年記念事業」に向け最新の調査・研究に基づく平城宮跡資料館の展示リニューアル、及び古代都城等に関する国際共同研究の成果の展示・公開について検討を始める。

【事業名称】	平城宮跡資料館における展示・公開(Ⅰ６(３))　(Ⅰ６(５))

【事業概要】
平城宮跡資料館において、常設展、速報展等を実施する。

【担当部課】	企画調整部	【事業責任者】	部長　岡村道雄

【スタッフ】
千田剛道、桑原隆佳

【年度実績概要】
展示：
平城宮跡資料館において、常設展、速報展等を開催した。常設展は通年開催し、速報展等は以下の４件開催した。
○特別企画展「地下の正倉院展―平城宮木簡の世界」(2007. 10.23～12.16)
重要文化財指定をうけた木簡を約 80 点を展示した。
○速報展「平城宮東方官衙の調査」(2007.6.1～7.1)
東方官衙地区の調査成果について、写真、図面、出土遺物を展示した。
○速報パネル展「西大寺薬師金堂の調査」(2007.8.7～9.14)
薬師金堂の調査成果を遺構の写真パネルを中心に展示した。
○速報展「平城宮跡東院地区中枢部の調査」(2007.11.13.～12.16)
東院官衙地区の発掘成果について、遺構写真、図面、出土遺物を展示した。、
アンケート：
平城宮跡資料館において、入館者に対するアンケート調査をおこなった。
アンケート実施機関　2007 年 10 月 23 日(火)～12 月 16 日(日)
アンケート回収率

入館者数	回収数	回収率
14,849	825	5.56%

常設展に対する満足度

入館者数	回収数	回収率	満足度(普通以上)
14,849	825	5.56%	745(91.7%)

詳細：	とても良い	かなり良い	普通	あまり良くない	まったく良くない	無回答
	302(37%)	265(33%)	178(22%)	20(2.5%)	47(5.8%)	13(1.6%)

特別企画展「地下の正倉院展―平城宮木簡の世界―」にたいする満足度

入館者数	回収数	回収率	満足度(普通以上)
14,849	825	5.56%	714(90.9%)

詳細：	とても良い	かなり良い	普通	あまり良くない	まったく良くない	無回答
	282(36%)	236(33%)	196(22%)	23(2.9%)	49(6.2%)	39(4。7%)

【実績値】

平成 19 年度の入館者数	入館者の満足度	公開日数	展示品貸し出し件数
85,486 人	91.7%	306 日	28 件

【備考】
展示に因んでカタログを作成した。
特別企画展『地下の正倉院展―平城宮木簡の世界』2007.10

（様式２）

自己点検評価調書

№.　２２３０

１．定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性			
判定	A	A	A			

備考

２．定量的評価

観点	入館者数	入館者の満足度				
判定	A	A				

備考
年間目標入館者数
平城宮跡資料館　72,500 名

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	展示内容および、速報展、特別企画展の実施などの順調な開催を評価し、A と判定した。 次年度においてもさらに、一般に分かりやすい展示をめざすとともに、速報展の一層の充実に努めたい。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	常設展、速報展ともに順調に実施できた。とくに速報展では、各発掘現場の調査成果を速報するようにつとめるという方針が軌道にのった。また、重要文化財指定をうけた平城宮木簡について、特別企画展として公開できたことも特筆される。 今後も調査研究の速報的な公開をめざして、努力したい。

（様式１）　　№.　２２３１

業務実績書

中期計画の項目 （Ｉ６（３））	黒田記念館、平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館については、研究成果の公開施設としての役割を強化する観点から展示を充実させ、調査・研究成果の内容を広く一般に理解を深めてもらうことに資する。入館者数については、前期中期計画期間の年度平均以上確保する。

【事業名称】	飛鳥資料館における常設展示の充実と特別展示の開催　（Ｉ６（３））

【事業概要】
特別展の実施：春期特別展示キトラ古墳壁画四神玄武」　２００７年4月20日（金）～6月24日（日）
秋期特別展示『奇偉荘厳　山田寺』　２００７年10月19日（金）～11月25日（日）
企画展の実施：夏期企画展示『ときを撮す』　２００７年8月1日（水）～9月2日（日）
：冬期企画展示『飛鳥の考古学２００７』　2008年1月4日～2月3日
巡回展：『絵で見る考古学』　2008年2月9日～3月2日
山田寺出土展示部材の経年変化の計測研究
アジア史の中の飛鳥文化の研究として飛鳥地方壁画古墳の研究
飛鳥時代の工芸技術の研究として飛鳥・奈良時代の金工品の研究

【担当部課】	飛鳥資料館	【事業責任者】	学芸室長：杉山洋

【スタッフ】
加藤真二、西田紀子

【年度実績概要】
春春期特別展　「キトラ古墳壁画四神玄武」　２００７年4月20日（金）～6月24日（日）
キトラ古墳壁画「玄武」特別公開　２００７年５月１１日（金）から２７日（日）
玄武が特別公開されるのを記念して、古代における玄武の種々相を展示するよう計画した。
夏期企画展写真『ときを撮す』　２００７年8月1日（水）～9月2日（日）
発掘調査に関連する写真資料を広くご紹介するため、このたび、飛鳥資料館では、
奈良文化財研究所写真室でおこなう文化財写真業務の展覧会を企画しました。
本企画展では、キトラ古墳や高松塚古墳の調査に用いた撮影機器の展示を交えつつ、当研究所が所蔵する写真資料についてご紹介した。
秋期特別展『奇偉荘厳　山田寺』　２００７年10月19日（金）～11月25日（日）
山田寺後出土の遺物一括が平成19年度に新たに重要文化財に指定された。この新指定を記念して、これまで一堂に展示されることのなかった遺物を、できる限り多く展示するように試みた。さらに展示に当たっては当館第２展示室に復元した東回廊の中　に順路を設け、回廊を通りながら出土部材を見学できるように考えた。
冬期企画展『飛鳥の考古学２００７』　2008年1月4日～2月3日
飛鳥において２００６年度中に発掘発見された注目すべき遺物遺構について展示を行った。
巡回展『絵で見る考古学』　2008年2月9日～3月2日
考古学イラストレーターとして著名な早川和子氏の作品展の開催した。

【実績値】
刊行図書　５冊
講演会　　６回

【備考】
刊行図書（５冊）「キトラ古墳壁画四神玄武」　飛鳥資料館図録第44冊　平成18年４月　「ときを撮す」　飛鳥資料館カタログ第18冊　平成18年８月　「奇異荘厳山田寺」飛鳥資料館図録第45冊　平成18年10月　「飛鳥の考古学2007」飛鳥資料館カタログ第19冊　平成20年１月　「延岡市教育委員会蔵鏡研究図録」飛鳥資料館研究図録第10冊　平成20年３月
講演会（５回）　「キトラ古墳壁画四神玄武」記念講演会　平成19年5月20日（日）奈良県立万葉文化館　企画展示室
白石太一郎氏（奈良大学教授）、川野邊渉氏（東京文化財研究所修復材料研究室長）
ギャラリートーク　8月18日（土）午後2時　井上直夫　中村一郎（奈良文化財研究所企画調整部写真室）
土肥　孝氏（文化庁主任文化財調査官）「山田寺の発掘調査と重要文化財指定」　10月28日（日）
鈴木嘉吉氏（元奈良文化財研究所所長）「山田寺の建築を再考する」11月3日（土）
ギャラリートーク　2月23日（土）午前11時・午後2時　２回　早川　和子氏　（イラストレーター）

（様式２）

自己点検評価調書

No. ２２３１

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	正確性			
判定	A	A	A			

備考
適時性…国民の文化財に関する適時的な興味への即応性
独創性…わかりやすい展示のための創意工夫
正確性…文化財の知識を正確な展示によって伝える

２．定量的評価

観点	論文等数					
判定	A					

備考

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	展覧会を春夏秋冬の４回開催するとともに、巡回展も開催し、飛鳥の文化財を広く国民に開示するという目的を達成することができた。さらに定量的にも目標とする入館者数を大きく上回っている。こうした進捗状況を総合的に判定してAとした。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度の計画を当初の予定どおり遂行したことから、当事者は順調であると判定した。

（様式１）　　No.　２２３２

業務実績書

中期計画の項目 Ⅰ６（３）	黒田記念館、平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館については、研究成果の公開施設としての役割を強化する観点から展示を充実させ、調査・研究成果の内容を広く一般に理解を深めてもらうことに資する。入館者数については、前期中期計画期間の年度平均以上確保する。

【事業名称】	藤原宮跡資料室における展示公開　（Ⅰ６（３））

【事業概要】
都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）展示室において、常設展示、発掘調査成果の速報展示などを実施し、展示公開の充実をはかる。

【担当部課】	都城発掘調査部　飛鳥藤原地区	【事業責任者】	部長　巽淳一郎

【スタッフ】
松村恵司、村上　隆、豊島直博、廣瀬　覚、長谷川透、玉田芳英、小田裕樹、丹羽崇史、関広尚世、青木　敬、次山　淳、中川あや、高田貫太、石田由紀子、箱崎和久、黒坂貴裕、番　光、市　大樹、竹本　晃、井上直夫、岡田　愛

【年度実績概要】
藤原宮跡資料室では、常設展示を通年にわたり実施した。特に、奈良県・橿原市主催の『藤原京ルネッサンス』の期間中（2007 年 9 月 7 日～11 月 25 日）は無休とし、土・日開館（延べ 27 日間）をおこなった（期間中入室者 3,092 人）。また、申請のあった団体へは展示説明等の応対をした。
エントランス部分では、発掘調査成果を速やかに公開するため速報コーナーを設け、甘樫丘東麓遺跡（第 146 次）、石神遺跡（第 19 次）、藤原宮大極殿院南門（第 149 次）の発掘調査成果、および保存処理の終了した石神遺跡（第 18 次）出土鋸およびレプリカの展示、藤原宮大極殿院南門出土地鎮具の速報展示（2008 年３月 18 日～４月 18 日）を行った。また、2007 年 11 月 1 日～12 月 27 日（48 日間）、高松塚古墳壁画の映像公開を実施した（期間中入室者 2067 人）。
また、展示活用のために、石神遺跡（第 19 次）出土敷葉工法遺構の切り取り保存処理、藤原宮大極殿院南門出土地鎮具のレプリカ作成を実施した。
地方公共団体の博物館等の求めに応じ、各種展覧会への保管遺物ならびに模型・模造品等の出陳をおこなった。

【実績値】
平成 19 年度の入室者数 6,885 人、　開室日　272 日、　遺物貸出し件数 12 件、　所蔵品のレプリカ作成依頼１件

【備考】
①　奈良文化財研究所「藤原宮大極殿院南門出土地鎮具の内容物について」展示解説リーフレット、2008.3

（様式２）

自己点検評価調書

No.　２２３２

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	継続性	発展性		
判定	A	A	A	A		

備考
適時性：発掘調査・研究成果の速やかな公開。
独創性：展示における修復、模型製作。
継続性：常設展示、および速報展示の恒常化。
発展性：速報展示における展示方法・内容の工夫。

２．定量的評価

観点	入室者数					
判定	A					

備考

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	常設展示とともに、エントランスでの速報展示コーナーが定着し、調査成果公開の速報性がより高まった。入室者数も適切であり、総合的にＡと判断した。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	常設展示とともに、エントランスでの速報展示コーナーが定着し、調査成果公開の速報性がより高まった。入室者数も適切であり、総合的に順調と判断した。

（様式１）　　No.　２２３３

業務実績

中期計画の項目 （I6（4））	文化庁が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業に協力し、支援を実施する。また、宮跡等への来訪者に文化財に関する理解を深めてもらうため、解説ボランティア事業を運営するとともに、各種ボランティアに対して、活動機会・場所の提供等の支援を行う。

【事業名称】	文化庁平城宮跡等管理事務所との連絡調整及び連携協力（Ｉ６(4)）

【事業概要】
文化庁平城宮跡等管理事務所の運営に対する積極的協力を以下のとおり実施する。
○施設の公開・利用等に係る連絡調整及び連携協力
○各種行事、発掘調査等の連絡調整
○修繕等に係る相談、状況の把握、業者の紹介等

【担当部課】	管理部業務課	【事業責任者】	業務課長　東博信

【スタッフ】
今西康益、飯田信男、久保慶史、松本正典

【年度実績概要】
平城宮跡及び飛鳥・藤原宮跡における文化庁平城宮跡等管理事務所の運営に対し、積極的な協力を行った。

○宮跡利用申込みに対する連絡及び申込者との打合せ
○各種行事、発掘調査等に係る連絡調整
○宮跡内建物、工作物等の修繕に当たり、状況の把握、文化庁・業者との連絡調整、現場監理等
・都跡通りコンクリート柵修繕
・平城宮跡内松枯他伐採処分
・平城宮跡内東院庭園清掃
・平城宮跡内ポール修繕
・平城宮跡内朱雀門グレーチング修繕
・平城宮跡内東院庭園池循環設備修理
・平城宮跡内石垣修繕
・藤原宮跡車止め修繕

○住民等からの苦情対応・取次ぎ
・宮跡内水路、道路等の修理改善等
○平城宮跡内禁止行為への対応・異状報告
○所轄消防署との連絡調整
・平城宮跡内火災等対応調整
○放置車両・ホームレス対策・盗難のための警察署との打合せ
・平城宮跡内朱雀門グレーチング盗難
・藤原宮跡車止め盗難

【実績値】

【備考】

（様式２）

自己点検評価調書

№.　２２３３

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		

備考
適時性：緊急性の高い連絡・修繕相談等へ適時に対応
独創性：宮跡内建物、工作物等の維持管理に寄与
発展性：専門知識を生かした協力による人的投資上の効率性
継続性：需要に応じた継続的な連携協力体制

２．定量的評価

観点						
判定						

備考

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業への協力・積極的支援については、国内外から同宮跡を訪れる視察者の連絡調整や研究所における研究成果をもとにした説明協力を実施した。 また、同宮跡で種々発生する事案について、文化庁平城宮跡等管理事務所は元より、関係機関と連絡を図り、事態の終息に寄与した。 この結果を判断して、A と認めたものである。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	施設の公開・利用等の連絡、各種行事・工事・発掘調査の連絡、修繕相談・状況の把握・業者の紹介等、各業務について積極的に協力できたと考える。 特に、修繕相談等は、緊急性の高い場合が多かったが、適時・的確に対応できた。 今後もこのペースを維持しつつ実施していきたい。

（様式１）　　№　２２３４

業務実績書

中期計画の項目 （Ⅰ６（4））	文化庁が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業に協力し、支援を実施する。また、宮跡等への来訪者に文化財に関する理解を深めてもらうため、解説ボランティア事業を運営するとともに、各種ボランティアに対して、活動機会・場所の提供等の支援を行う。

【事業名称】	平城宮跡解説ボランティア事業の運営（Ⅰ６（4））

【事業概要】
平城宮跡の来訪者に平城宮跡解説ボランティアが、平城宮跡資料館、遺構展示館、復原建物等の案内・解説を行うことにより、 研究所の調査研究の成果を発信するとともに、平城宮跡の歴史や文化遺産に対する理解を深めてもらう。
年間約８万人に解説事業を行い、解説ボランティアについては、継続的に約１００名確保し、研修、学習会の実施や解説資 料の配付等の積極的な活動支援を行う。

【担当部課】	管理部文化財情報課	【事業責任者】	課長　山田耕一

【スタッフ】
千田剛道、永井あつ子、桑原隆佳

【年度実績概要】
本年は平城宮跡を訪れた約７万９千人に案内・解説を行った。平城宮跡は小・中学校の校外学習の場としても活用され、その　説明は解説ボランティアに依頼されることが多く、学校関係者等から高い評価を得ている。
この事業は、８年を超え定着してきているが更に充実させるため、解説を受けた来訪者にアンケート調査をおこなった結果、 ８８．５%が良かったと答えている。
解説ボランティアの活動支援として、解説のための専門研修（６日間)、「続日本紀」読書会（毎月１回）　等を実施し、解説資料の配付をおこなうなど積極的に支援した。

○アンケート調査集計表（回答５３９）
ボランティアの解説を受けられた方にお尋ねします。解説の満足度はいかがですか。

１	とてもよい	２４３（４５．１%）
２	かなりよい	１１６（２１．５%）
３	ふつう	１１８（２１．９%）
４	あまりよくない	１１（　２．０%）
５	まったくよくない	５１（　９．５%）

【実績値】
・解説ボランティア：１３１名
・ボランティア解説延べ人数：７９，０７４名
・各種ボランティアに対する学習会等

専門研修	６日間／年
平城宮跡クリーンフェスティバル	１日間／年
『続日本紀』読書会	１日間／月
清掃活動	３日間／年

【備考】

（様式２）

自己点検評価調書

No.　２２３４

１．定性的評価

観点	継続性	効率性	発展性	正確性		
判定	A	A	A	A		

備考
継続性：ボランティア解説者の学習等により基礎的知識は十分な成果を認める。
効率性：ボランティア解説者の案内は十分に成果を認める。
発展性：ボランティア解説者の来訪者への影響は十分な成果を認める。
正確性：ボランティア解説事業の運営に十分な成果を認める。

２．定量的評価

観点	ボランティア登録者数	事業参加者数	参加者の満足度			
判定	A	A	A			

備考
ボランティア登録者数　：１００人
事業参加者数　：４５，０００人
参加者の満足度　：８０％

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	ボランティア解説者の学習成果により、ボランティア解説を受けた方の満足度が８８．５％が良かったと答えていることから、総合的に判断してAと認めたものである。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	解説ボランティア事業は、ボランティアの更なる研修、事業参加者数の増加、ボランティアへの積極的な支援も順調に実現できたと考える。今後もこのペースを維持しつつ平城宮跡の公開活用に力を注ぎたい。

（様式１）　　№　２２３５

業務実績書

中期計画の項目 （Ⅰ６（4））	文化庁が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業に協力し、支援を実施する。また、宮跡等への来訪者に文化財に関する理解を深めてもらうため、解説ボランティア事業を運営するとともに、各種ボランティアに対して、活動機会・場所の提供等の支援を行う。

【事業名称】	各種ボランティアに対する活動機会・場所の提供、学習会の実施等への支援（Ⅰ６（4））

【事業概要（全体計画を含む）】
平城宮跡で活動しようとする各種ボランティア、また文化財関係のボランティアに対して要請があれば、平城宮跡（施設を　含む）を活動の場所として提供することや、文化財に関する学習会等への講師の派遣をおこなう等の支援を行い、ボランテ　ィア団体の育成に寄与する

【担当部課】	管理部文化財情報課	【事業責任者】	山田耕一

【スタッフ】
千田剛道、永井あつ子、桑原隆佳

【年度実績概要】
各種ボランティアに対する学習会等を実施した。
平成13年11月に設立された「特定非営利活動法人平城宮跡サポートネットワーク」に対して、活動機会、場所、講師等の　派遣等、積極的な活動支援をおこなった。具体的には、平城宮跡の清掃活動への用具等の提供、歴史文化講演会への講師派　遣、市民参加の平城宮跡クリーンフェスティバル、拓本づくり教室を行った。それらは新聞、テレビでも紹介され好評であ　った。
また、「特定非営利活動法人なら・観光ボランティアガイドの会」から朱雀門、東院庭園でボランティア解説をしたいと要　請があり、活動場所の提供をおこなった。

【実績値】
・各種ボランティアに対する学習会等

専門研修	６日間／年
平城宮跡クリーンフェスティバル	１日間／年
『続日本紀』読書会	１日間／月
清掃活動	１１日間／年
NPO通歴史文化講演会	３日間／年
万葉集勉強会	１日間／月
拓本づくり教室・出前教室	１０日間／年

【備考】

（様式２）

自己点検評価調書

No.　２２３５

１．定性的評価

観点	継続性	適時性	効率性			
判定	A	A	A			

備考
継続性：各種ボランティアへの支援には、十分な成果を認める。
適時性：各種ボランティアへの支援は、学習会の実施等十分な成果を認める。
効率性：各種ボランティアへの場所の提供要請等には、十分な成果を認める。

２．定量的評価

観点	各種ボランティアに対する学習会等	参加者数	参加者の満足度			
判定	A	A	A			

備考
ボランティアに対する学習会実施回数：２回
参加者数：１５０人

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	「特定非営利活動法人平城宮跡サポートネットワーク」に対して、平城宮跡の清掃活動への用具等の提供、歴史文化講演会への講師派遣、市民参加の平城宮跡クリーンフェスティバル及び拓本づくり教室への場所提供等、種々の支援を行い、活動の活性化に貢献した。これらを総合的に判断して、Aと認めたものである。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	各種ボランティアの要請に対し、積極的に支援し、各事業が行われた。 今後も各種ボランティア育成に寄与したい。

【書式A】 施設名 東京国立博物館 処理番号 2301

中項目	6 情報発信機能の強化

事業名	(6) 文化財情報の公開促進 ① 自主媒体の活用、マスメディアとの連携強化

事業概要	文化財に関する情報を積極的に発信し、国内外における日本文化への理解を深める。

担当者	担当部課	事業部情報課	事業責任者	情報課長 高橋裕次

実績･成果	・「東京国立博物館情報アーカイブ・ウェブサイト」をリニューアルし、運用を行った。研究員の調査研究成果の一部を公開するとともに、科学研究費による成果（データベース）の公開を開始した。 ・「東京国立博物館ウェブサイト」の「画像検索機能」を改善し、運用を開始した。検索対象画像をこれまでの約2万6千点から約5万点に拡充した。 ・将来的な収蔵品情報の外部への公開を見据えた「列品管理プロトタイプデータベース」の構築を進め、業務遂行上で列品情報を円滑に検索、取得できる機能を充実した。 ・携帯端末用のサイトについて検討を進め、運用にあたっては、外部のサーバーを使用する必要のあることが明らかとなったため、今後の実用化に向けて平成 20 年度に具体的な実験を行うことにした。

定性的評価（目標に対する成果の達成状況）	・情報アーカイブサイトの開設により、調査研究成果の公開が随時可能となり、文化財に関する情報発信が、より積極的に行えるようになった。 ・画像検索機能の改善により、館外からの画像利用の利便性が向上した。 ・列品管理プロトタイプデータベースの構築により、近い将来の列品情報の公開を行う基礎的な条件が整った。 ・今後、よりスムーズな情報の登載が行えるように、システムの改善に努める。

定量的評価

項目	実績	目標値	評価
ウェブサイトへのアクセス件数	5,504,468 件	1,928,966 件	A
検索対象画像の拡充	50,000 点	―	―

中期計画期間における進捗状況	中期計画に対して、順調に成果を上げている。

【書式A】 施設名 京都国立博物館 処理番号 2302

中項目	6 情報発信機能の強化

事業名	(6) 文化財情報・研究成果の公表 ① 自主媒体の活用、マスメディアとの連携強化

事業概要	・ウエブサイトによる情報提供サービスの充実 ・メールマガジンの刊行

担当者	担当部課	学芸課	事業責任者	情報管理室長 難波洋三

実績･成果	・携帯電話端末用ウェブサイトの充実を図り、利用者の拡大とサービスの向上に努めた。 ・学術研究公開の一環として、研究紀要「学叢」をウェブサイトで公開した。 ・京都国立博物館メールマガジンを創刊。加入者数は 2,358 件である。

特別展紹介・収蔵品データベース（モバイルサイト）

学叢 WEB 公開

定性的評価（目標に対する成果の達成状況）	・携帯電話端末用サイト内の特別展覧会、特集陳列、平常展示、各種講座・イベント等、各コンテンツを適宜更新し、モバイルユーザーに対して、最新の博物館情報が提供できるように努めた。 ・携帯電話端末用サイト内の収蔵品データベースの掲載データを追加し、アーカイブとしての充実に努めた。また、モバイル収蔵品データベースで実験提供中のモバイル版収蔵品画像の拡大機能は、引き続き㈱NTT ドコモの協力により、実証実験を兼ねた提供を行う。 ・学叢 WEB 公開は、在庫状況・販売現況及び学術的価値を総合的に判断しながら、適宜オンラインでの公開を促進し、大学・博物館等の研究活動に寄与している。 ・京都国立博物館メールマガジンの運用を開始し、11 号まで刊行。加入者は順調に増加している。

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	
	ウェブサイトへのアクセス件数	733,885 件	521,965 件	A	

中期計画期間における進捗状況	中期計画に対し、順調に成果を上げている。

【書式A】 施設名 奈良国立博物館 処理番号 2303

中項目	6 情報発信機能の強化

事業名	(6) 文化財情報・研究成果の公表 ①自主媒体の活用、マスメディアとの連携強化

事業概要	ウェブサイトをはじめ、研究紀要、展覧会図録、広報誌等の自主媒体を活用し、国内外に文化財の情報を発信する。

担当者	担当部課	学芸課情報サービス室	事業責任者	情報サービス室長 中島 博

実績･成果	・ウェブサイトへのアクセス件数 1,402,834 件 ・携帯電話用ウェブサイトを継続して作成し、手軽に博物館情報を入手できる環境を整えた。 ・研究紀要『鹿園雑集』9 号を刊行し、論文 3 本、国際研究集会の研究報告 2 本、作品研究 1 本、資料紹介 2 本、各種報告 5 本を掲載した。 ・ウェブサイトに研究紀要『鹿園雑集』9 号の PDF 版を掲載した。 ・展覧会図録を 6 冊刊行した。 ・広報誌「奈良国立博物館だより」(年 4 回刊行) の各号に、研究成果の一部を掲載した。 親と子のギャラリー 「仏さまの彩り」図録

定性的評価(目標に対する成果の達成状況)	・年度計画に示した、ウェブサイトへの研究成果の公開の充実に関しては、研究紀要の掲載により達成された。また、当館保有の文化財の写真公開の充実に関しては、19 年度はフィルムからのデジタル化に止まり、ウェブサイトへの掲載には至らなかった。 ・中期計画に示した、ウェブサイトへのアクセス件数の増加については、18 年度 124 万 9,608 件に対し、19 年度は 140 万 2,834 件であり、前年度実績を超えている。

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	
	ウェブサイトへのアクセス件数	1,402,834 件	670,948 件	A	

中期計画期間における進捗状況	中期計画に対して、順調に成果を上げている。

【書式A】 施設名 九州国立博物館 処理番号 2304

中項目	6 情報発信機能の強化

事業名	(6) 文化財情報・研究成果の公表 ① 自主媒体の活用、マスメディアとの連携強化

事業概要	ウェブサイトで提供する情報の充実を図り、利用者から意見を吸い上げられる体制を検討する。

担当者	担当部課	文化財課	事業責任者	研究員 東 昇

実績･成果	ウェブサイトで提供する情報の充実については、昨年度に引き続き、迅速な情報提供に努めている。また夜間、休日における情報掲載、訂正についてもできる限り即時対応している。 利用者からの意見吸い上げのために、ホームページ経由の問い合わせに対しては、適切に九博メールによる回答を実施している。 また特別展において「ブログるぽ」を毎回設定している。「ブログるぽ」は、WEB 上でブログ執筆希望者を募集し、実際に特別展を観覧した来館者に、撮影禁止の館内画像等を提供して、ブログを書いてもらう仕組みである。これら来館者のブログは九博 WEB 上に直接リンクしている。 九博ホームページ（トップ）

定性的評価（目標に対する成果の達成状況）	・「ブログるぽ」は、現在のネット社会に柔軟に対応した内容であり、国内の美術館博物館でも先駆的事例である。昨年の「若冲展」を契機に開始し、展覧会ごとに徐々に認知度が高まりつつある。 ・ブログは、館による公式広報とは違う個人の率直な感想であるところから、来館者の反応ぶりを館としてもリアルタイムに把握することができる。来館前に他人の感想を知ることで展覧会への興味が増進し、それによってより多くの人々の来館を促す働きをすることが期待される。またブログを書いている人々にとっても、大きな露出効果があり、相互に有意義である。 ・情報掲載のタイミングに関しては、館内決裁手続きの関係上、イベント実施直前になってようやく担当部署に情報提供される場合がまま見られるため、関係部署と連携しより速やかに情報掲載を実施する必要がある。

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	
	ウェブサイトへのアクセス件数	5,943,616 件	5,017,378 件	A	

中期計画期間における進捗状況	中期計画に対し、順調に成果を上げている。

【書式A】 施設名 東京国立博物館 処理番号 2401

中項目	6 情報発信機能の強化

事業名	(6) 文化財情報の公開促進 ②－1 デジタル化の推進

事業概要	デジタル化を推進し、情報の公開に努める。

担当者	担当部課	事業部情報課	事業責任者	情報課長 高橋裕次

実績･成果	1) 収蔵品等の写真の高精細デジタル化 ・所蔵品等の 4×5 カラーフィルムの高精細デジタル化を実施した。 ・所蔵品等のモノクロマイクロフィルムの高精細デジタル化を実施した。 ・カラーのデジタルデータについては、来館者をはじめとする幅広い利用者の求めに応じて、利用に供した。 ・マイクロフィルムについては、インターネットを通じた情報提供ができる環境構築の検討と準備を進めた。 2) 国指定文化財の新規撮影・高精細デジタル画像化 ・重要文化財のうち歴史資料「壬申検査関係資料」の一部である湿板写真と調査記録の図集について、高精細デジタル画像を作成した。 3) 収蔵品の基本情報のデータ化・文書記述言語（XML）化 ・明治時代の博物館所蔵図書の解説目録である「博物館書目解題略」のテキストデジタル化を実施した。 4) 法隆寺献納宝物のデジタル高精細画像等の提供 ・事業計画のとおり法隆寺献納宝物デジタルアーカイブの提供を継続した。

定性的評価（目標に対する成果の達成状況）	1) 収蔵品等の写真の高精細デジタル化 ・カラー画像については、日常的に行われている撮影によるフィルムのデジタル化をほぼ完全に行える体制が確立し、写真撮影から最短約 2 週間でフィルム及びデジタルデータの提供が可能となった。 ・18 年度から開始したマイクロフィルムのデジタル化については、印画紙の供給打ち切りといった社会的な情勢を考慮し、目標を大きく上回る枚数のデジタル化を行うことができた。 2) 国指定文化財の新規撮影・高精細デジタル画像化 ・18 年度に引き続き、通常の写真撮影の体制では作成困難な分野の重要文化財について、高精細画像を作成した。 ・画像を作成したのは、指定件数としては 1 件であるが、その中に写真約 100 枚、調査記録約 400 点の資料を含んでおり、画像数としては約 500 点に及ぶ。 3) 収蔵品の基本情報のデータ化・文書記述言語（XML） ・博物館所蔵資料の来歴等を調査する上で必要な基礎的情報の蓄積の上積みを行うことができた。 4) 法隆寺献納宝物のデジタル高精細画像等の提供 ・法隆寺献納宝物デジタルアーカイブの提供については、これまで通りに実施することができた。今後はさらに利便性を向上させ、内容についても更新につとめていきたいと考えている。

定量的評価

項目	実績	目標値	評価
デジタルデータ作成件数	124,996 件	18,829 件	A
うち 4×5 フィルム	3,396 件	3,000 件	A
うちマイクロフィルム	121,600 件	20,000 件	A
高精細画像の作成	1 件（500 点）	－	－
収蔵品の基本情報のデータ化	553,000 字	300,000 字	A

中期計画期間における進捗状況	中期計画に対して、順調に成果を上げている。

【書式A】 施設名 京都国立博物館 処理番号 2402

中項目	6 情報発信機能の強化

事業名	(6) 文化財情報・研究成果の公表 ②-1 デジタル化の推進

事業概要	収蔵品のデジタルデータ化を推進する

担当者	担当部課	学芸課	事業責任者	情報管理室長 難波洋三

実績･成果	・収蔵品のデジタルデータを作成し、文化財情報システム及び公開収蔵品データベースへの登録を暫時行っている。 ・当館所蔵の指定文化財の画像を高精細画像化し、ウェブサイト上で公開する予定(館内試験公開段階：日英版)。重要文化財高精細画像データベース「KNM Gallery」。	
	公開収蔵品データベース	重要文化財高精細画像公開システム「KNM Gallery」

定性的評価（目標に対する成果の達成状況）	・収蔵品のデジタルデータを作成し、文化財情報システム（館内研究・管理用）及び公開収蔵品データベース（一般公開）に暫時登録し、当館デジタルアーカイブ及び公開情報サービスに益する様、努めた。 ・当館所蔵の指定文化財を高精細画像化し、公開システムの構築及び六ヶ国語（日英韓中仏西）での提供を行う。現状で、日英版のシステム構築は終了（館内試験公開中)。韓国語、仏語、中国語、西語版は、20 年度前半に構築予定。画像コンテンツは、約 6 割が加工・登録済み。鋭意作業を進め、完全なシステム公開を早期に実現する。

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	
	デジタルデータ作成件数	8,047 件	4,359 件	A	

中期計画期間における進捗状況	中期計画に対し、順調に成果を上げている。

【書式A】 施設名 奈良国立博物館 処理番号 2403

中項目	6 情報発信機能の強化

事業名	(6) 文化財情報・研究成果の公表 ②－１デジタル化の推進

事業概要	仏教美術を中心とした文化財に関わる情報資源の蓄積を図り、館内における調査研究に活用するとともに、広く一般への公開をおこなう。

担当者	担当部課	学芸課資料室	事業責任者	資料室長 吉澤 悟

実績･成果	・当館で調査研究および写真撮影をおこなった文化財の情報を、文化財情報システムへ登録し、データを 3,889 件更新した。 ・上記のうち公開準備のできたものを写真検索システムへ登録し、データを 2,018 件更新・公開した。 ・重要文化財を中心とした当館館蔵品の写真原板を 183 件デジタル化した。 ・当館所蔵のガラス乾版を 512 件デジタル化した。 ・西新館学習コーナーに国宝を高精細画像で閲覧できるシステム（5ヶ国語対応）を常時公開している。 ・重要文化財の高精細デジタルアーカイブの公開にむけて、テキストデータ、高精細画像データの整備をおこなった。

定性的評価（目標に対する成果の達成状況）	・館蔵品・寄託品、展覧会等で借用した文化財について写真撮影をおこない、その情報を文化財情報システムに継続して登録しており、情報の蓄積・公開が順調に進んでいる。 ・重要文化財の高精細デジタルアーカイブの公開にむけて、館蔵品情報のデジタル化につとめ、図版目録掲載の基本情報をデータベースに登録した。また、高精細画像データの整備も進めている。今後は解説文も含めた関連情報のさらなるデジタル化を図る。 ・19 年度デジタルデータ作成件数については、18 年度実績 3,830 件は上回ったものの、予算措置の図られた前中期目標期間の年間平均実績を上回るには至らなかった。

定量的評価

項目	実績	目標値	評価
写真検索システム更新件数	2,018 件	2,000 件	A
デジタルデータ作成件数	4,584 件	8,471 件	C

中期計画期間における進捗状況	中期計画に対して、やや困難な状況である。

【書式A】 施設名 九州国立博物館 処理番号 2404

中項目	6 情報発信機能の強化

事業名	(6) 文化財情報・研究成果の公表 ②―1 デジタル化の推進

事業概要	収蔵品のデジタルデータを作成する。(600 件)

担当者	担当部課	文化財課	事業責任者	資料管理室長 伊藤信二

実績･成果	新たに撮影した収蔵品・出品作品に関する写真を、順次 3 種類のデジタルデータ (300KB、2MB、120MB) に変換しており、3,295 件作成した。 (新規撮影写真) 国宝 栄花物語巻十四

定性的評価(目標に対する成果の達成状況)	デジタルデータ化することによって、カラーポジ複製を必要としない利用への対応が容易となり、カラーポジの劣化も防げるようになった。 また、学芸部内の調整を図り目標とする件数を大幅に上回る画像を作成することができた。

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	
	デジタルデータ作成件数	3,295 件	1,890 件	A	

中期計画期間における進捗状況	中期計画に対し、順調に成果を上げている。

【書式A】 施設名 東京国立博物館 処理番号 2501

中項目	6 情報発信機能の強化

事業名	(6) 文化財情報の公開促進 ②－2 博物館関係資料の収集、レファレンス機能の強化

事業概要	調査研究や、博物館の事業・運営に有用な図書をはじめとする博物館関係資料を収集する。図書システムの運用によって、データ整備を実施するとともに、レファレンス機能を充実させ、サービスの向上をはかる。

担当者	担当部課	事業部情報課	事業責任者	情報課長 高橋裕次

実績･成果	・図書館システムを運用し、図書 4,013 冊、逐次刊行物 約 3,700 冊を新規整理した。 ・図書の遡及入力を 4,574 冊実施した。（うち洋書 2800 冊を含む） ・雑誌類の合冊製本を 604 冊(うち考古学会寄贈分 364 冊)、修理製本を 46 件実施した。 ・図書のバーコードラベル貼付を約 5 万件実施し、併せてデータの確認・訂正作業を行った。 ・図書資料の良好なコレクション構築のために、新刊書を中心に古書など404冊（運営協力会補助分を含む）を購入し、当館に収蔵されていない図書の寄贈を受け入れた。また、17年度に寄贈を受けた考古学会雑誌のうち、19年度は外国語雑誌（未製本3,791冊）について製本可能なものを製本し、登録を行った。 ・宗像氏寄贈図書約 5,300 冊について、受入準備のためのリスト作成を行なった。 ・利用者用 OPAC（蔵書検索システム）および美術図書館横断検索（ALC）に加入し、図書約 136,000 冊、雑誌約 4,500 タイトルの OPAC 公開を行い、利用の促進につとめた。 ・館内の図書利用規定を整備し、図書館システムを利用した館内図書貸出を開始した。 ・法隆寺宝物館において、観覧者向け図書コーナーサービスを継続実施した。 ・資料館の今年度の資料館利用者は 3,134 人、閉架図書利用は 3,321 件である。 マイクロフィルム閲覧は 650 件で、今後のデジタル化により利用件数の増加が見込まれる。 ・資料館でのレファレンスサービスは 3,299 件であるが、DNP アーカイブコムによる画像の利用に関連して、作品や画像についての問い合わせが増加している。 ・マイクロフィルムを含む図書および写真カードのコピーサービスは、23,287 枚であった。

定性的評価（目標に対する成果の達成状況）	・日本・東洋の美術、歴史などの調査研究や、博物館の事業・運営に有用な博物館関係資料について、寄贈の受入、購入などによる収集につとめた。 ・図書のバーコードラベル貼付、データ整理を推進し、図書システムの機能を向上させたことで、図書検索の利便性と、貸出の円滑化によるサービスの充実をはかることができた。 ・視聴覚資料の閲覧を可能とするため、視聴覚資料の整理約 1,300 件を行なった。 ・レファレンス機能をさらに充実させるための努力を続けており、次年度には、諸機能の改善に見合った新しい利用案内を作成する予定である。

定量的評価

項目	実績	目標値	評価
収蔵品・出品作品等の写真撮影及び関連データの整備	3,642 件	3,000 件	A
新規図書整理	4,103 件	－	－
遡及入力	4,574 冊	－	－
雑誌合冊および修理製本	650 冊	－	－
受入準備のリスト作成	5,300 冊	－	－
視聴覚資料の整理	1,350 点	－	－
資料館利用者数	3,134 人	－	－

中期計画期間における進捗状況	中期計画に対して、順調に成果を上げている。

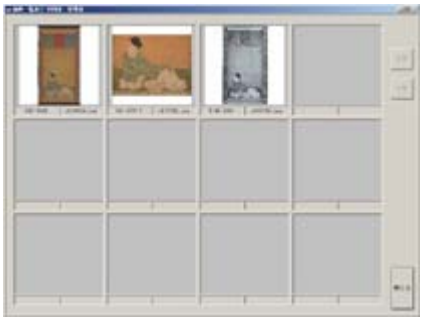
【書式A】 施設名 京都国立博物館 処理番号 2502

中項目	6 情報発信機能の強化

事業名	(6) 文化財情報・研究成果の公表 ②-2 博物館関係資料の収集、レファレンス機能の強化

事業概要	・収蔵品・出品作品等の写真撮影及び社寺調査等での写真撮影並びに関連データを整備する ・観覧者向け図書コーナーサービスを継続実施する

担当者	担当部課	学芸課	事業責任者	情報管理室長 難波洋三

実績･成果	・収蔵品・出品作品等の写真撮影及び社寺調査等での写真撮影並びに関連データを整備した。撮影した写真は暫時、写真画像管理システムに登録し、各種データベースへの二次提供を行った。 ・観覧者向け図書コーナーサービスを継続実施した。	
		
	写真画像管理システム	観覧者向け参考図書コーナー

定性的評価(目標に対する成果の達成状況)	・目標値をやや下回っているものの、収蔵品・出品作品等の写真撮影及び関連データを整備する事ができ、当館の関係資料の充実・及び関連データベースへの提供が実現できている。今後も継続して本事業を実施することにより、データの蓄積、提供に努めたい。 ・平常展示館において、観覧者向け図書閲覧コーナーサービスを継続提供し、観覧者へのサービス向上に努力した。

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	
	収蔵品・出品作品等の写真撮影及び関連データの整備	4,256 件	約 5,000 件	B	

中期計画期間における進捗状況	中期計画に対し、順調に成果を上げている。

【書式A】 施設名 奈良国立博物館 処理番号 2503

中項目	6 情報発信機能の強化

事業名	(6) 文化財情報・研究成果の公表 ②－2 情報、資料の収集・蓄積、レファレンス機能の充実

事業概要	館内外の展覧会事業や研究活動に必要な図書情報の収集、管理、提供を行う。

担当者	担当部課	学芸課資料室	事業責任者	資料室長 吉澤 悟

実績･成果	図書の収集は19年度において2,000冊の新規受入を果たし、また展覧会カタログの受入は471冊を数えた。これらは仏教美術資料研究センターにおいて随時データ入力し、検索利用に供している。これにより、同センターの保有する図書総数は63,452冊、展覧会カタログ9,847冊となった。一方、書架が飽和状態にある部門については、利用頻度で分別し、低い図書の別置場所を確保し、センターの利用空間を確保した。

定性的評価（目標に対する成果の達成状況）	・図書受入実績および登録、レファレンスに関して、昨年度と同等の成果を挙げている。

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	
	収蔵品・出品作品等の写真撮影・関連データの整備	3,240件	3,000件	A	

中期計画期間における進捗状況	中期計画に対して、順調に成果を上げている。

【書式A】 施設名 九州国立博物館 処理番号 2504

中項目	6 情報発信機能の強化

事業名	(6) 文化財情報・研究成果の公表 ②―2 情報、資料の収集・蓄積、レファレンス機能の充実

事業概要	① 収蔵品・出品作品等の写真撮影及び関連データを整備する。(約600件) ② 海外調査で撮影した写真やビデオを展示や教育普及事業で活用するための整備を行う。 ③ 博物館資料（収蔵品、図書、写真など）の横断的データベースの効率的な運用を検討し、実施する。

担当者	担当部課	文化財課 交流課	事業責任者	資料管理室長 伊藤信二 主任研究員 永井真佐美

実績･成果	①収蔵品・出品作品などの写真を 1000 件超撮影し、写真データベースの充実を図った。 ②「あじっぱ」内の「あじ庵」や「たなだ」で活用するために、中国でのビデオや画像の撮影を行った。 ③博物館資料（収蔵品、図書、写真など）の横断的データベースは、稼働中の業務システムにおいて効率的に運用している。購入・寄託・寄贈や借用などにともなう新規の収蔵品や図書データは随時入力するとともに、既存データについても未記入項目の遡及入力を実施し充実を図っている。 「あじ庵」で使用予定の中国京劇の画像

定性的評価（目標に対する成果の達成状況）	① 収蔵品・出品作品等の写真撮影及び関連データの整備については、目標を大きく上回り写真データーベースの充実が図れた。 ② 「あじっぱ」で教育普及事業として活用している海外調査でのビデオや画像等を、計画的に追加していく必要がある。 ③ 収蔵品登録業務に応じたデータの登録体制を整備する必要がある。

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	
	収蔵品・出品作品等の写真撮影および関連データ整備件数	約 1000 件	600 件	A	

中期計画期間における進捗状況	中期計画に対し、順調に成果を上げている。